

が黄色くなつてゐた時、わたしは此處へ来たのよ。」と、感慨の深さうな顔をして女史が言つた聲を、お内儀さんは今でもまだちやんと耳の底に残してゐて、蓄音機のレコードのやうに、いつでも取り出して、再び其の通りの響きを聞くことが出来るに思はれるさうだ。

其の夜二人はまた泣いて別れたが、停車場まで送つて行くことの出来ない身重の身體を悶え／＼して、月光の下にだん／＼遠ざかつて行く磯村の姿を見送つてゐた女史のいぢらしさは今想ひ出しても涙がこぼれると、お内儀さんは、古い涙の後に新らしい涙を誘はれさうであつた。

産の氣の附いたのは、其の夜であつた。だいぶ難産で、明け方になつても生れなかつた。夜通し付き切りにしてゐた産婆はへト／＼に疲れ、お内儀さんが千葉病院の産婦人科から醫者を呼んで来たのは、翌日の朝の九時頃であつた。さうして漸く生れたのが琴子である。

「けれどもわたしね、中山さんのお強い方には驚きましたよ。あの難産に、陰々聲一つ立てないで、辛抱していらつしやるんですものね。」と、お内儀さんは、今までもまだ感心をついけてゐる。全くそれまでも、それから後も、あれくらゐ強い産婦を見たことがないさうで、「えらくなる方は違つて居りますね。」と、また今更に感嘆した。

産の重かつたわりに、産後の肥立ちはよかつた。少しも乳汁を吞ませないで、初めから牛乳で育てたから、乳房が張つて、熱さへ出たが、其の代りに、中山女史の乳房は處女の形を失つてゐなかつた。

お産があつても、生れた子が健かに育つても、中山女史の家からは、誰れも出て來なかつた。女史は寂しさうに琴子を抱いて、産褥に坐つてゐたが、三週間ばかり経つと、漸くお父さんが怖い顔をして洋服姿で出て來て、少しも琴子の顔を見ないで、産婆やお内儀さんにも碌々挨拶さへせず、さつさと女史を引ッ立て、連れ歸



つた。

「それでも、中山さんがね、あんなにえらくおなりになつてから、埋め合はせをして下さいましたが、其の時はあなた、ほんとにお安い養ひ扶持で、琴坊を預かつたんでございますよ。中山さんのお父さんといふ方は、あなたほんとおつかない憎らしい人なんです。中山さんがお氣の毒で、琴坊が可哀さうだつたから、わたしも蟲を殺して預かつたんですが、それでなかつたらあなた、突つ返してやるところでしたよ。」と、お内儀さんは、餘程口惜しかつたと見えて、昔話に齒ざしりをした。芳子も青木も、磯村といふ人の消息を知りたかつたが、産氣のつく晩、白い月光の下で、中山女史に別れてからこのかた、もうこの海岸へは姿を見せなかつたさうで、恐らくはそれが中山女史と磯村との永久の別れであつたらうと、お内儀さんは話した。

「琴坊も可哀さうに、親の縁が薄くてね。父親には、母親のお腹の中に入つたまゝで別れ、母親とも、しみじみ物を言つたことなしに、死に別れたのですものね。」と内儀さんはまた鼻を詰まらしつゝ言つた。

「其の代り、あなたがたのやうな親切な人に育てられたから、まアあなたがたが両親のやうなものですわ。」と、芳子も涙ぐみながら言つた。

「勿體ないあなた、わたしなんぞ琴坊の親になれるものですか。琴坊々と自分の子のやうに言つてるのもわるいとは知つてるのでございますが、癖になつてしまひましてね。今ちや琴坊も、琴子さんと呼んだつて、返辭もしてくれませんかからね。」と内儀さんは言つて、先刻琴子の立てた線香がもう消えてしまつたのに心付き、中山女史の寫眞の前へ廻り寄つて線香を手向けた。琴子は何處へ行つたのか、四邊に姿を見せなかつた。



## 二十五 不味いお鮓

話し込んでゐて、十二時になつてしまつたので、芳子と青木とは目配せをしあつて、暇を告げようとする、琴子の手で大きな皿に入れた海苔巻きのお鮓が運ばれた。「ほんとに、こんなもの、お口に合ひますまいけど、どうか召上つて下さいまし。」と言つてお内儀さんは、また煮出したやうに濃い番茶を注いでくれた。

其の不味いお鮓も、お内儀さんの優しい心でお美味しく食べながら、芳子は青木と相談して、中山女史から琴子へ遣した澤山のお金を、二人で預つた次第を手短かに話し、なほ琴子の戸籍がどうなつてゐるかを尋ねてみると、お内儀さんはよく知らなかつたが、何んでも別に一戸を立て、戸主になつてゐるらしいと言つた。芳子も青木も、そんなことには一向不案内なので、どうなつてゐるのかと、頻りに話し合つてゐると、お内儀さんは不圖思ひ出して、黒ずんだ用筆筒の抽斗をば、がさごそ

と探して、皺くちゃになつた戸籍の謄本を持つて来て、「これが琴坊の人別ださうですよ。」と言つた。青木が受取つて見ると、成るほど中山琴子として一戸を立て、中山君枝私生子女といふ肩書で、母の家に入る能はざるに付き一戸を立てるといふ意味が書いてあつた。これなら手續ささへすれば、中山女史の遺産を立派に琴子が襲ぐことが出来るであらうと、芳子は青木と、領さ合つて安心した。

「いづれ、東京へ引き取つて育てることにするつもりですが、まア當分はどうかこのまゝ預つておいて下さい。」と、青木が言ふと、お内儀さんは、満足氣な顔をして、「何んのあなた、わたしの方ぢや、いつまでも琴坊を側に置きたいが、それでは當人の爲めになりますまいからね。東京へ連れて行つて貰へば結構でございますよ。學校もね、この土地のへ入れてありますよ、よく出来ると言つて、しよつちう先生から譽められ通してございますよ。」と言つた。さうして「琴坊一寸おいで」と、琴子を手招きすると、琴子は直ぐ母のやうに馴染んでゐるお内儀さんの側へ来て、其の肩



に手をかけた。

「琴坊や、お前はね、東京へ連れて行つて貰ふんだつて。……」と、まだお内儀さんの言葉の終らないうちに、琴子は忽ち泣き出しさうな聲になつて、「あたゐ、厭やだ」と首を振つた。

「何故厭やだい、琴坊。」と、お内儀さんは呆れた顔をした。

「こゝ、あたゐの家だい。お婆さんと一緒に居るんだい。」と言つて、琴子はお内儀さんの背中にしがみ附いた。

「さうか、よし、それぢや琴坊は東京へやらない。こゝが琴坊のお家だ。琴坊はいつまでも此家に居るんだ。」と、お内儀さんが宥めるやうに言ふと、琴子は漸くお内儀さんの身体から離れて、じろくくと氣味わるさうに、芳子と青木とを見た。

「お嬢さん、此方へ入らッしやい。」と、芳子が言ふと、琴子は氣味わるさうに尻込みをした。

「この子はまだ生れてからお嬢さんと呼ばれたことがないので、喫驚してゐるんですよ。」と、お内儀さんは、痛ましうな顔をして琴子の顔を見ながら、頬に振りかゝつた後れ毛を撫で上げてやつた。芳子はまた悲しい心持ちになつて、竊と涙を拭いた。

くれぐれも琴子のことを頼んで、二人が漁夫の家を出たのは、長い初夏の日もだいぶ西に傾いた頃であつた。其の時まで顔を見せなかつた主人が、何處からか立ち現はれて、啞のやうに黙つたまゝで、ペコ／＼とお辭儀ばかりしてゐた。芳子も青木も、中山女史が會つて、千葉邊の漁夫の家では、女が主として外部の用事や社交に當り、男は魚を漁るといふことのほかに、何んの能もなく、口の利きやうさへ知らないと言つたのを思ひ出し、其の時は女史が何故そんなことを知つてゐるのかと怪しんだが、成るほどこれで總べてが解つたと頷きながら、またありし日の女史を偲んだ。



## 二十六 結婚の話

歸りの汽車の中で、芳子は青木に向つて、寒川海岸に隠れてゐた時代の中山女史に就いて、さまざまに語り合つた。

「中山先生の藝術は、總べて其の時代に芽ぐんでゐるのですね。」と、青木は言つた。「さうでせうか。」と、芳子は考へた。

「考へてみると、其の時代が中山先生の花だつたんです。一番充實した先生の生活は其の時代で、あとはもう其の名残か或は津のやうなものでせう。苦しかつたでせうが、また娛しかつたに違ひない。身を苦しめなければ、ほんたうの生活は得られない。」と、青木はまたしんみりとした調子で言つた。

「さうでせうかね。」と、芳子はまた同じことを言つて考へた。

「あなたのことを奥さんと言つたね、あの婆さんは……。」と、稍暫らくしてから、

青木はこんなことを言つて薄笑ひをした。

「厭やですね、何故あんなことを言つたんでせう。」と、芳子は首を傾けつゝ、別に顔を赧くもしないで言つた。

「僕たちも、中山先生の若い時分のやうな生活をしたいね。」と、青木は少し興奮しつゝ言つた。

「わたしには、そんな、自分を欺き、世間を欺くやうなことは出来ませんね。中山先生を悪く言ふのではありませんし、先生にはまた特別の事情があたりになつたんでせうけれど。」と、芳子は眉を擡めつゝ言つた。

「妊娠といふことさへなかつたら、中山先生の境遇もまた少し變つてゐたか知れませんか。妊娠は婦人の弱點ですね。同時にまた強點ですけど、今の社會では、どうかすると、それが婦人の弱點になる場合が多いんですね。」と、青木は考へて言つた。しかし、芳子は妊娠などといふことに就いて考へたくなかつた。一生を童貞で



送つて、何か知らず独立した婦人の職業をやつて行きたいといふのが、芳子の希望で音楽家、小説家なぞが、彼女の眼の前に、燦然として光つたのであつたが、音楽の天分の無さうなことは、どうやら星島先生によつて、それとなく注意されたやうだし、小説家とても頼みに思ふ中山女史を失つては、一寸取り付く手がかりもなくなつたし、それにその方の天分も、何んだか乏しいやうな氣がするから、寧ろこれからは、婦人の社會事業に身を委ねて、一生をそれに捧げたい。生活の手段としては、女事務員でも、タイピストでも、或は先頃或る新聞社から話のあつた婦人記者でもよい。さうして自分の手初めの仕事としては、中山先生の遺言によつて、琴子を保護して行くことだと、芳子は決心を固めてゐた。其の矢先きに、青木は何んだかもじくして、

「あなたは結婚をするつもりはないんですか。」と露骨に問ひかけた。

「えい。」とだけ芳子はキツパリと答へた。

「若し戀を得ても？」

「わたしは、戀なんかすることは無いと思ひます。心が冷たく出来てゐますから。……」

「どんな冷たいものでも、熱を加へたら沸きますよ。鐵だつて石だつて溶けることがあるんですもの。……僕は去年の夏富士山へ登つて、鎔岩の長くつゞいてゐるのを見た時、さう思ひましたよ、清らかな聖者の戀といふやうなことをね。あの固い岩も曾つては溶けて流れたことがあるかと思ふと、恐ろしいやうで、不思議なやうで、また本質的にさうなければならぬといふことが、しみじみ考へられましたよ。凡そ若い男や女の結婚をしないとか、戀をしないとかいふことはど當てにならない言葉はないと思ひますね。」と、青木は如何にも老成た物の言ひやうをした。

「それでも、昔しから男でも女でも一生を童貞で送つた人があるぢやありませんか。」



「それは境遇がさうさせたので、詰まり機会がなかつたといふことが、大原因でせう。僕は別にそんな人をえらいとも思ひませんよ。」と、青木は空囁くやうに言つた。

「さうですか知ら、しかし境遇も機会も、矢張り其の人の人格が作るのではないでせうか。人格の反映といふやうに思はれることもあるぢやありませんか。境遇とか機会とかいふことを全く外部から來るとばかりは考へられませんか。」

「さういふこともあります。しかし僕が子供の時父を亡つたといふことは、全く僕自身の人格に關係がないんですからね。」

「しかし、わたしたち二人がかうして、中山先生の遺兒のお世話をするといい境遇は、わたしたち自身に作り出したんでございますね。ほゝゝゝ。」

「兎に角僕は、これから大に戀をし、結婚をするつもりです………だけど芳子さん。今日あなたはあの漁夫のお内儀さんに奥さんと見られましたね。僕は大に光榮に感じましたが、あなたはどんな気持ちがしましたかね。あはゝゝゝ。」と、青木はま

たあのことを言ひ出して、態とらしく大きな聲で笑つた。

「厭やでしたわ。」と言ひつゝ、芳子は顔の赧くならうとするのをヂツと耐へてゐた。

「それぢや、若し僕があなたに戀をしても、結婚を申し込んでも駄目ですね。勿論童貞生活を望んでゐる人に戀をするのは無理だが。」と、青木はまた笑つた。

其のうちに汽車が兩國橋驛へ着いたので、二人は其處から一先づ青木の家へ行つた。何分二人さりで中山女史の遺産を預つてゐるといふのも不安なことだし、芳子が銀行の帳面を保管してゐるが、それをまだ父母にも話さないで、自分の本箱へ隠してゐるのは、悪いことのやうに思はれたから、萬事は青木の母に相談して、其の智慧を借りようと思つたのであつた。

青木の阿母さんは芳子の來たのを、この上もなく喜び迎へた。



## 二十 東華女學校の芳幸會

芳子が五年の間、一日も休まずに通學した東華高等女學校の卒業式の當日、總代として答辭を讀む時、日頃學校に對して抱いてゐた不平不満が、彼女の約しやかな東髪の頭の中に突然爆發し、答辭の代りに學校の方針を攻撃して、校長始め職員生徒を驚かし、多くの來賓を呆れさせたといふ事實は、いまだにまだ方々で話の種になつてゐて、東京はもとより地方の女學校から中學校にまで影響を及ぼし、中には急に校風を自由にしようとして、却つて頭の古い父兄側から故障を持ち込まれたといふやうな滑稽を演じた女學校もあつた。

其中にあつて、本家本元と言つてもよい東華高等女學校では、表面上兎も角をさまりかへつて、そんなことがあつたかなアと、とぼけてゐる風に見えた。尤も内部分ではいろ／＼とた／＼も起つたやうで、音樂の星島光子などは、聲樂家にふさは

しからの組擔任といふ様なうるさい役を命ぜられたのを機會に辭職してしまふし、其の他にも稍新しい教諭は、二三人も學校を去つた。しかしそれ等は皆學校の内輪のことで、外部に對しては何處までも、穩健着實といふ都合のよい文字で舊思想を維持し、所謂良妻賢母の養成所として、日比谷大神宮と連絡を取りさうな教育法を維持してゐた。

『あの學校からあんな生徒が出たとは、實に不思議だ。』

さういふ言葉が幾度か繰りかへされて、其の度に花村芳子の名が人々の口の端に上つた。譽める方からも、毀る方からも――

東華女學校は、表面靜穩であつたが、四年、五年の生徒の中には、芳子を敬慕するものがだん／＼殖えて來て、時々來る手紙の返事を出すのに芳子は忙しさを感ずるほどであつた。

其のうちに、暑中休暇がふ／＼と近づいて來た。第一學期の試験が始まつて、



この學校獨特のやかましい試験法が行はれたが、四年級の乙組の國語の『星月夜』といふ捻つた題の作文に、花村芳子を讚美したのが現はれた。こは一大事と擔任教諭から藤島校長に告げて、校長の決裁を求めると、校長は忽ち顔色を變へ、二三の重立つた職員と相談をした上、其の作文を書いた今井幸子といふ優等生を、一詮議にも及ばず放校處分ときめて、それを廊下の掲示場の、會つて花村芳子に無期停學を命ずる旨の掲示を出したのと同じところへ、矢張り家事の教師の手蹟で貼り付けた芳子はあれだけのことをしたのに、無期停學といふ表面だけでも、些か穩かな處分であつたのに、たゞ芳子を譽めたといふだけで、直ぐ今井幸子に放校といふ、學校として、極刑を用ゐたのにも、芳子の一件をば、頑冥固陋な校長が如何に氣に病んでゐたかといふことが分つたのであつた。

ところが丸の内の或る大會社の社員である今井乙彦といふ常識に富んだ紳士は、娘の幸子が東華女學校から放校處分を受けたといふことに對して、芳子の父のやう

にあとなしくはしてゐなかつた。今井は保證人として學校の召喚を受くるまでもなく、自ら進んで藤島校長を訪ひ、會社へ出勤のおくれるのも厭はずに二時間ばかり校長と激論をした。しかし今井は敢へて自分の娘幸子の所爲を是認して、辯護しようとするのではなかつた。娘には娘の思想があり、自分には自分の思想がある。自分は自分の思想を尊重するといふもに、また娘の思想をも尊重する。自分の持つてゐる尺は自分のものを測るだけに用ふる。自分の尺で他人の思想や行爲を測つて、それがうまく自分の考へてゐた寸法に嵌らぬからと言つて、やきもきしても仕様がなない。自分の子と雖も、身體が別になつてゐれば他人だ。傳來の言葉でいふ身内とか他人とかの意味でなく、別の人格を有する一個の『人』としての他人だ。『人』は『品物』ではない。自分の身體を掴つても子供は痛さを感じないと同様に、子供の身體を掴つても親たる自分は痛くない。子供は決して親の身體の一部分ではない。親子の關係にあつてさへさうだ。學校と生徒としての關係に於ても、一層生徒をば『品



物』として扱ふことを慎んでもらひたい。學期試験の作文の中へ、學校を出された生徒を讚美するやうなことを書くのはもとよりわるいが、さういふことを書かせるやうにした責任は學校にもあると思ふ。兎に角、他の學校では成業の見込のない劣等生が放校や停學になるのに、この學校では、學科がよく出来て、操行にも申し分なく、缺席もしないといふ優等生がさういふ處分に遭ふのを見ても、學校として少し考へて貰ひたい。といふ意味のことを述べて、藤島の古い頭に突つかつたのであつた。さうして其の意見がまた都下の或る新聞へ寄書として出たので、これを機會に芳子の問題までが再燃して、前の時はたゞ新聞の社會面を賑はしたのに過ぎなかつたが、今度は好奇心以上に世間がこの事件に注目し教育界を中心として、根強い力の靜かに動きかゝるといふ形勢が見えて來た。

折りも折りとて、金曜日きんようびの正午頃しょうごころ、東華高等女學校とうわこうとうじやうがくかうの廊下の揭示場——芳子や今井幸子を處分する揭示の出たところへ——大きな紙に墨黒々と書いたものが貼り出

された。それは學校に對して反省を求むる爲めに決議したことがあるから雨天體操場へ御集合を請ふといふ意味のもので『芳幸會幹事』としてあつた。學校の幹事は驚いた。其の揭示を剝がしてしまつたが、校内には不穩の形勢が充ち満ちて、新築の雨天體操場へ集る生徒の數は刻々に殖えて行つた。

すると小使が何か細長い紙片を持つて來て、雨天體操場の柱へ貼り付けたのを見ると、『修繕中に付き入る可からず』とあつた。集つてゐた生徒は一齊にドツと笑つて、カーキ色の詰め襟を着た小使の後姿を見送つた。何處にも破損したところのない雨天體操場、古ぼけた校舎を持つてゐるこの學校では最近に建てたので、一番新らしくて堅牢な雨天體操場の修繕中だといふのは、生徒に取つて、いろ／＼の意味から可笑しかつたのである。この學校の遣り口はいつもこれで、これが校長の官僚式頭腦の最も鮮明な表現であつた。

『入る可からず』といふ揭示はもつと入れといふことを獎勵するやうなものであつ



た。だん／＼と雨天體操場に集るものが多くなつて、一年と二年とを除いた三年以上の生徒四百人ばかりが、殆んど皆顔を揃へた。流石に男の學校の騒動のやうに喧騒するものはないが、それだけに沈痛の氣が場内に充ち満ちた。小使が来ては、塵埃取りと箒とを手に、掃除するやうな風をして、形勢を窺つて行くだけで、校長を始め職員一同は、事の意外に驚くの餘りにか、茫然としてゐるらしく一人として顔を出さなかつた。おほかた職員室に集つて、小田原評定をしてゐるのであらうと思はれた。

いつも一時になると鳴る午後の始業の鐘が、今日は三十分ほど早く零時半頃に鳴つた。しかし雨天體操場に集つた生徒の群は、鐘を聞いても動かなかつた。やがて授業は一年と二年とだけで始められたやうであつた。階下の教室の窓から、心配さうにして此方を見てゐる一年級の少女の顔があつた。

暫らくすると、芳幸會の幹事として五年の磯野房子といふ色の黒い生徒が、高い

臺の上に立つた。拍手は一時に多くの細い綺麗な手から起つた。房子の載つてゐる臺は、卒業式の時これを六つ重ね、上から布片をかけて大卓子に代用する麥酒箱の一つであつた。それを誰れが此處へ持つて來たのか、知つてゐるものはなかつた。「皆さん、わたしはこゝに芳幸會の幹事の一人として皆さんに報告をいたしたいと思ひます。それに就いて先づ御承知を願つておかなければならないのは、芳幸會といふ名稱であります。御承知の通り、この學校には芳香會といふ校友會がありまして、在校生及び卒業生を會員とし、毎年二回芳香といふ變な……ほんたうに變な雜誌を出してゐるのであります。わたし達の今度拵へました芳幸會といふのは、其の芳香會とは別であります。香といふ字を幸とかへただけで、發音もよく似て居りますが、しかし全く別物でありまして、わたし達の芳幸會は、去る三月二十六日、卒業式の當日に卒業を取り消されて、無期停學を命ぜられた花村芳子さんの芳の字と、今度また其の花村さんを讚美したといふことで、無殘にも放校の處分を受けた



今井幸子さんの幸の字を取つて、芳幸と名づけたのであります。』

房子は此處まで述べて、一息吐いた。彼女の顔は眞ッ赤に興奮して、だらくと汗が湧き出してゐた。拍手がまた割れるやうに起つた。

『この芳幸會は常分學校内の秘密結社にして置くつもりでありましたが、そんなことをするよりも公に會の名を發表して堂々と學校に迫つた方がよいといふ方もありまして、先刻あんな掲示を出したのであります。初めて芳幸會の名を御覽になつた方は定めて不思議にお考へになつたのであります。現在の芳幸會員は六十二人でありまして、會の目的は、不當に放校處分を受けられた今井幸子さんを復校させること、去る三月卒業式の日卒業を取り消された花村芳子さんに對して卒業の取消しを取消させること、この二つを學校に請求し、なほ學校の古くさい方針を改めさせ、頭の古い教師を新しい教師に取りかへさせ、星島先生の復職を學校に要求し、學校が承知しても先生のお聽き入れがなかつたら、星島先生のやうな音楽家を招聘する

ことを學校に要求し、裁縫の時間の過當に多いのを減少させ、英語と音楽の時間を増させること、先づこれくらゐのことをやる積りで、わたしたちの間で相談を進めたのであります。御賛成の方はどうかもう暫らく此處にお留りを願ひます。反對の方はどうか御遠慮なく教室へお入りをお願いいたします。』

息を切らしながらかう言つて、房子が臺の上からデツと一同を見渡すと、また拍手が沸くやうに起つて、誰れ一人教室へ入るものもなかつた。

そこで幹事は直ぐに、學校に對する要求書を作り、此處に集つただけの生徒の署名を求めて、半紙三十枚ほどのものを學校の事務室へ出した。

學校では突然三日間休業の掲示を貼り出した。

## 二十 火花を散らして



芳子は今迄碌に名も知らなかつた磯野房子等五名の芳幸會幹事の訪問を受けて、東華女學校の騒動の顛末を聽かされたのであるが、學校では三日間の臨時休業の間に、職員が手分けをして生徒の自宅に父兄を訪ひ、父兄から説得させて、芳幸會を脱會させ、どうしても軟化しない生徒だけを放校若しくは無期停學にして、この騒動を鎮めようとしてゐるらしいとのことであつた。

芳子のところへさういふお客の來てゐる最中に、母のところへまた別のお客があつて、女中の澤はお茶を出すのに忙しかつた。父は相變らず印刷所の方へ行つてゐるし、妹の磯子はまだ學校から歸らないし、午後一時の夏の空は淺緑りに晴れて、庭の木には蟬が鳴いてゐる。

『もう直ぐ暑中休暇ですから、學校では事によると、それまで臨時休業をつゞけて八月いっぱい、いよいよ生徒の軟化運動をするつもりかも知れません。』と、房子は男のやうに岩塵な手を振り／＼言つた。

『時機がわるかつたのね。』と、芳子は微笑みながら言つた。毎年第一學期の試験が終つてから、暑中休暇の始まるまで二週間ほどは毎日學校へ遊びに行くやうなものであつた。大抵の學校では、暑中休暇を八月一日からとしてあつても、七月の二十二三日頃にもう休んでしまふのであるが、東華女學校では、例の校長の几帳面な氣質から、キチンと七月いっぱい授業をつゞけ、教科書の復習をさせたり、或は缺席の多かつた生徒に個人教授のやうなことをして、休んだところを習はしてゐる。それだから今度のやうな騒動が起れば、直ぐ休業をして、暑中休暇に續けてしまつても、學校としては苦痛がないのである。

『さうよ、九月の新學期の始めだつたら、一層手筈へがあつたか知れないんです。だけどやりかけたものですから、何處までもやり通して、仕方がなければ同盟退學をするのよ。』と言ひ／＼、房子は芳幸會の連判狀を出して見せた。それは退學届の形式になつたもので、六十二人の女生徒が名前を並べて、見るも氣味のわるい血判



をしてゐた。他の生徒がスツカリ軟化しても、この六十二人だけは、房子を筆頭に進退を共にし、社會に向つて學校と戦ふつもりで、今月のうちには神田の方で、演説會を開くといふ手筈にまでなつてゐた。

『其の演説會には、どうぞ花村さん、あなたも出て下さいました。今井さんにも出て頂くんですから。』と、房子初め五人の女生徒は口を揃へて言つた。

『さうね。』と、芳子は考へた。元はと言へば自分のしたことが導火線になつたのだから、これはどうしても断るわけに行かない。先頃の文藝講演會で、中山女史の草稿を代讀した経験から、大勢の人の前に立つといふことも左ほどむづかしい業ではないのを知つてゐる。氣がかりになるのはたゞ父母の反對であるが、あの事件以來自分に對してさう束縛を加へないから、これも黙つて視てゐるか知れない。さう思つて、芳子は、

『えい、出ませう。わたしも。』と承諾の返辭をした。飛び立つやうにして、芳子が

賛成し、承諾してくれるであらうと豫期してゐた五人の女生徒は、芳子の態度の餘りに冷靜で且つ沈着過ぎるのに、些か失望したやうであつたが、しかし兎も角も満足して、歸つて行つた。

芳子のお客が去つたと殆んど同時に、母のところへ来たお客も歸つたやうであつた。芳子は机に凭れて、ぼんやりと東華女學校のことを考へてゐた。自分にはもうズツと大きい使命が齎らされてゐるやうな氣がする。學校に居た時は、學校だけを自分の狭い世界として、奮慨したり、反抗したりして、卒業式の折のあの動作となつたのであるが、かうして世間へ出て見ると、學校なんぞはどうでもよい、どうでもよくはないが、學校は葉で、教育界全體といふものが枝である。さうして世間が其の幹で、古い土の中に深く根をおろしてゐる東華女學校といふ一枚の葉が殊に硬ばつて大きく出たから、眼に立つたやうなもの、今の學校といふものは大抵あれとさう違つてはゐないであらう。根から幹に改良を加へるのがこれからの自分たち



の仕事だ、これさへ出来れば葉は自然によくやつて来る。――

芳子よしこがこんなことを考へてゐるところへ、母親はやおやを先きに立て、いつの間に歸つたのか父親ちちおやもともに兩親揃つて、芳子の室へ入つて來た。こんなことは、ほんたうに珍らしいのである。

『どうなすつたんです。』と、芳子は驚いた顔をした。

『お前に少し、話があるんだよ。』と、母親はにこ／＼して言つた。

「お客さまだつたさうでございませぬ、どなたでしたの。」と芳子も機嫌よく笑ひ顔をして言つた。机の前には五人分の夏座蒲團が、離れ／＼に亂れ置かれて、茶碗には茶の飲みさしが黄色く残つてゐる。

「お前のところも、ドツサリお客があつたのね。わたしんところへは青木さんの阿母さんが見えたんだよ。」と、母親は笑顔をつゞけてゐる。

「まア、さうですか。ぢやわたしも一寸お目にかゝればよかつた。」と、芳子は残り

惜しさうに言つた。

「お前に宜しくと仰しやつたよ。」と、母親はじろ／＼芳子の顔ばかり見てゐた。父親は有り合はした座蒲團の位置を足で直して、其の上へドカリと坐りながら

「芳子ツ、お前お嫁に行かないか。」と、大きな聲で言つた。

「あなたまア、藪から棒に、そんなことを。」と、母親が芳子よりも餘計に驚いた風であつた。

「話は單刀直入がいゝよ、ね芳子。」と、父親はまた大きな聲で言つた。芳子は眼を圓くして父親の顔を見てゐた。

「あなた、まア、そんな大きな聲で。」と、母親は父親を窘めるやうに言つた。

「大きな聲だつていゝぢやないか、別に悪事の相談をするんぢやないから。」と、父親も今日は殊のほか上機嫌である。

「芳子さん。」と、母親は聲を密めて、矢張りにな／＼しながら、「青木さんの阿母さん



んがいらしてね、……』と、少し口籠り、父親の方をヂツと見てから、唇をビクビクと震はして、

『お前をね、一郎さんのお嫁にきれいと仰しやるんだよ。』とさもなく嬉しい便りを聞かせるやうに言つた。芳子は黙つて俯向いてゐた。

『それでね、本人が何んと申しますか、相談してお返事いたしますと言つたんだが、本人同志は大層仲がいゝんだから、親御さんさへ承知して下されば、この縁談は直ぐ纏ると仰しやるんだよ。そしてね、實は媒妁人を立て、お話しするところだが、そんなことをするよりも、直かにかうやつてお頼みした方が、手ツ取り早くていゝと仰しやつて、氣さくな方ね、いづれ話が纏つてから、改めて相當な媒妁人を立てると仰しやるんだよ。青木さんのことはお前や磯子からちよいと聞いてはゐたが、そんなに御懇意にしてゐようとは思はなかつたもんだから、全く面くらつてしまつたよ。』と、毎親は包み切れぬ嬉しさを、顔いつぱい溢れさして言つた。父親はまた

父親で、

『青木博士にはわたしも一二度お目にかゝつたことがあつたよ。あの方がお亡なりになつた時は、全く惜しい學者を失つたと思つた。しかしあの方のお子さんがお前を貰つて下さるとは思はなかつた。これが金持ちの息子の嫁に望まれたとか何んとかいふのなら、慾に目がくれたやうだが、立派な學者の家へ貰はれて行くんだから名譽な話だ。他の家からの縁談なら、一應先方の家庭や血統を調べなければならぬが、青木博士ならもう立派なものだ。博士の遺産が十萬圓ほどあつて、生活には困らないし、あの一郎といふ息子さんが、またお父さんに似て、學校でも秀才だといふぢやないか、わたしはもう一も二もなく、差し上げますと言へばよかつたのにと思つてるんだよ。今歸つて來て其の話を聞いたからね。』と見苦しいほどの喜びを見せてゐた。

『それでね、あんまり直ぐお返事しても、此方のお腹を見透かされるやうでいけな



いから、二三日してから、わたしが行って、差し上げませうといふお返辭をして来るつもりなんだよ。いーだらう芳子。」と、母親は芳子が俯向いて黙つてゐるのを、さまりがわるいからだと思つてゐるやうであつた。芳子は一郎が千葉から歸りの汽車の中で、あれほど自分の結婚に對する考へを聞いておきながら、突然阿母さんをよこしてそんな話をさせるのは、餘りに解らな過ぎる行爲だと思つた。しかし或は一郎さんの阿母さんが自分だけの考へでそんなことを言つて來たのかも知れない何んにしても厭やな話が始まつたものだ、顔を擧めずにはゐられなかつた。

「ぢや、さういふ風にするよ。」

「それがいい、それがいい。」

父母は口を揃へてかう言ふと、立つて茶の間の方へ行きさうにしたので、芳子は慌て、「阿母さん、お父さん。一寸待つて下さい。」と呼び留めた。

「何んだね。」と、母親はニヤリ笑つて、元のところへ坐つた。父親は立つたまゝであつた。

「斷つて下さいな、青木さんへ。わたしそんなお嫁になんか行くのは厭やですから……。」と、芳子はキツパリ言つた。

「えゝ。」と、母親は驚きの眼を瞪つた。父親も意外だといふ顔をして、今度は蒲團も敷かずに、畳の上へベタリと坐つた。

「どうしてだいいお前。あんまり仲が好過ぎて、青木さんの一郎さんと何か喧嘩でもしたのかい。」と、母親は妙なことを言つて、二人がもう夫婦關係でも結んでゐるやうな口振りをした。それがまた芳子には腹立たしかつた。

「喧嘩するつて、わたしもう暫らく一郎さんにお目にかゝらないぢやありませんか。こなひだ千葉へ行つた時つきりですもの。」と、芳子はツンとして言つた。

「不思議だなア、近頃の娘は……親の口から縁談でも初まれば、赧い顔の一つぐらゐするものだよ。平氣で洒々して、旅行の相談でもしてるやうぢやないか。……。」と



うぞお父さんやお母さんのよろしいやうにと、芝居に出る娘のやうに、眞ッ赤になつて振り袖の先きを弄つてるやうなのは、今時居ないんかね。」と、父は滑稽まじりに言つたが、芳子は餘計にツンとしてゐた。

「ぢやどうして厭やなんだね。お前こんな結構な縁談はもう二度とありやしないよ。それに両方で氣心も分つてゐるんだし、まるで知らない同志が、一度見合ひをしただけで婚禮するのとは違つて、幾らか新式ぢやないか。……お前の好きな新式ぢやないか。家でもね。お前は長女だから、ほんとならお嫁にやれないところを、あまり結構な縁談だから、お父さんも磯子に聲を取ることにして、お前をほかへ遣ると仰しやるんぢやないか。ね芳子さん、どうしたんだよ。」と、母親はそろ／＼泣き聲になつて來た。

「貰うとか、差し上げるとか、そんなことを言はれるのが、わたしは一番厭やです。」と、芳子は、いよ／＼ツンとして言つた。

「何故だね、何處でもさう言ふぢやないか。いとこへ貰つていたゞけれや、女にはそれほど仕合せなことはありやしないぢやないか。」と、母親は父親の方ばかり見て、其の加勢を待つやうにしながら言つた。しかし、父親は黙つて俯向いてゐた。「わたしは品物ぢやありません、人間です。」と、芳子はキツパリ言つたが、この無智で温順な母に向つてこんなことを言はなければならぬのかと考へると、時代といふものが怨めしく、自分の方も矢張り悲しい心持ちになつて母親と同じやうに涙ぐんだ。

「若いうちは、そんな勝手なことが言つてゐられるが、年を取つたらどうするんだね。女は矢ッ張り若い時に早く身を固めなけれや、お婆さんになつてから悔んでもあつ付かないよ。わたしはお前がそんな理窟ばかり言つて、獨りであるうちに年を取つて、夫も子供もなく、其の日のことにも困るやうになりやしないかと思ふと、死んでも死に切れないよ。お前には男兄弟はなし、仕様がなないぢやないか。」と、



母親は到頭顔に両手をあて、おい／＼と泣き出してしまつた。

『阿母さん、あなたはそんな風に、結婚といふことを、全く生活の保證の意味に取つてゐらつしやるんだから、わたしたちの考へとすつかり違ふんですよ。食べる爲めに……男に養つて貰ふために結婚する。それぢやあなた結婚が一種の職業になるぢやありませんか。考へやうによつては、醜業婦になるのと、さして違はないでせう。阿母さん、このところをよう／＼考へて下さいな。人間と人間とは貴い愛によつて結合するのです。そんな生活の手段として男に養つて貰ひに行くなんぞは死んだつて、わたし厭やです。』と、芳子は母を相手にしながら、専ら父に聴かせようとして言つた。父の方がまだ幾らか自分の思想を理解してくれると思つたからであつた。しかし父は黙つて腕を拱いてゐた。

『それぢやお前、青木の一郎さんは嫌ひなのかい。嫌ひでどうして附き合つたの？』と、母親は涙の顔を上げて、不審さうに言つた。

『嫌ひぢやありません、青木さんは決して嫌ひぢやありません。友人として尊敬してゐます。然し戀愛はまた別です。』と、芳子は思ひきつて戀愛といふ言葉を両親の前に使つてみた。今迄はたゞ愛とだけ言つて、戀といふ字を避けてゐたのであつた。『戀愛？……』と、母親は涙の顔にもほくそ笑ひを浮べて、

『惚れたの腫れたのといふのも、若いうちのことだよ。まだ／＼お前は考へが足りない。』と、大層高飛車に出て來た。

『わたしだつて、それや戀愛を人生の一番貴いものだとも考へてはゐません。しかし戀愛のない結婚は人間として恥づべきものだと思つてゐます。阿母さんは、年を取つたら、年を取つたらと仰つしやるが、わたしたちは現在に生きてゐるのです。老後の準備をする爲めに生きてゐるのではありません。兎に角わたしはほんたうの生活をしたいんです。虚偽の生活は厭やです。』と、芳子はもう涙ぐみもしないで、いよ／＼強くなつて言つた。



「お前は親不孝だよ、親泣かせだよ。」と、母親はまためそくと泣いてしまった。芳子の新しい思想は、いよ／＼其の家にもや／＼してゐた古い思想や愚かな考へと、火花を散らして戦はなければならぬ時が来たのであつた。

## 二十九 六十二の娘子軍

東華高等女學校では、學校側の陰險な運動が效を奏して、芳幸會には續々脱會者を生じ、五年と四年との一部で血判の連盟状を作つた六十二人だけが、血の染んだ退學届を事務所へ投げ出して、大きな聲で歌をうたひながら、馴染の深い校門を出てしまつた。職員生徒から小使まで、皆悲愴な顔をして、其の一行を見送つてゐた。誰れ一人咳をするものもないほどに、學校の方は静まりかへつてゐたが、出て行く六十二人は足音高く大地を踏んで、歌ふ聲は近く、公園の森に反響した。一旦芳幸

會に入りながら學校と父兄との強壓に餘儀なくされ、涙を吞んで脱會した生徒たちは、この有様にまた新しい感激を起し、六十二人の後を追はうとして、職員に支へられたものも多かつた。校門は六十二人が出て行くと共に固く閉ざれてしまつた。六十二人の一隊は、先づ程近い芳子の家の前へ来て、一齊に萬歳を唱へた。近所の人々は何事が起つたのかと思つて、驚きながら駆け集つて来た。狭い横町は人でいッぱいになつた。白い服の巡查が来て、行通を整理した。

縁談で父母と衝突して以來、家にばかり引つ籠つてゐた芳子は、門前まで出て来て、磯野房子から事の顛末を聞くと、感激の餘り其處に突ツ立つて、新時代の爲めに、新婦人の奮闘を激勵する演説をした。さうなるともう雄辯も訥辯もなかつた。拍手の音は凄まじい勢ひで起つて、『花村芳子萬歳』の叫びは一點の雲もない夏の蒼空に響いた。

「區々たる東華高等女學校の如きは、最早や我々の敵とするに足りません。我々の



敵は更に強く廣い偽りの世の中にあるのを知らなければなりません。』の一語で、芳子の演説は結ばれた。六十二人の女生徒隊は又もや沸き立つやうに萬歳を唱へて、足並みを揃へつゝ、赤坂の方にある今井幸子の家へと向つた。

さア、翌日から新聞が大變であつた。譽めるもの、毀るもの、人々の意見は區區であつたが、大體に於て六十二人に同情する傾きがあつた。『六十二の娘子軍』などといふ標題を掲げて、冷かすやうな調弄ふやうな調子で、面白半分にあざけた筆を弄してゐる新聞もあつたが、そんな記事は具眼者から擯斥され、婦人のしたことと言へば必ず輕侮して慰み半分に見ようとする惡癖を矯正しなければならぬと思はせた。さうして社會の多くは皆今回のことをもつて、舊式教育の弊害が爆發したものと、若い婦人が眞に眼覺めかけて來た證據とした。

一時下火になつた花村芳子の名が、今井幸子の名とともに人の噂さに上り、磯野房子と合はせて三人の寫眞が殆んど毎日の新聞に出た。

七月の二十三日、其の日の午後一時から神田の××會館で東華女學校退學顛末報告演説會といふのが催されることになつて、出演者の番組には婦人問題、女子教育問題に新らしい見解を抱いてゐる梶浦法學博士の名を最後に、花村芳子、今井幸子、磯野房子など、人氣者の名がずらりと並んだ。

正午にならぬうちに、××會館はもう満員の札を出して表には多くの入場希望者が、鐵柵や閉された鐵門を押し倒さんばかりの勢ひで、あとからあとからと群がつて來た。

### 三十 自由女學園の企て

神田××會館の東華高等女學校同盟退學顛末報告演説會で、午後一時が鳴ると同時に、身動きもならぬほどいつばいに詰まつた聽衆から、破るゝやうな拍手に迎へ



られて第一番に演壇の人となつたのは、磯野房子であつた。彼女は肉つきのいゝ圓顔に、平生は黒いのが今日は紅を刷いたやうな色を浮べて、少し羞かむ氣味で、おどおどと聴衆の面前に立つた。

「丸ぼちや、確乎やれ。」

さういふ下卑た言葉で冷かす職人風の男までが入り込んでゐるのだと思はるゝほど、この演説會は一般的人氣になつたらしかつた。房子はまだ口を開かずに、吃と其の失敬な言葉の出た方角を睨んだ。

「おゝ、怖い。お前はえらいよ。」と、同じ方角からまた同じやうな下卑た言葉が出た。

「シツ、シツ、シツ。」

下卑た言葉の近くにゐた聴衆が二三人、口を揃へてかう言つた。

「何がシツ、シツ、シツだい。俺は猫でねえぞ。跳つかへり娘。お轉婆女學生の

曲藝を見に来たお客さまだ。だいまい一貫の木戸を拂つて来てら。馬鹿にするな。」と、其の下卑た言葉の主はだいぶ酒に酔つてゐるやうでもあつた。

「すべた早くやれ。……丸ぼちや……」と、下卑た言葉は引つ切りなしに、其の男の口から出て来た。房子はいつまでも口を開かずに、其の方ばかりを睨んでゐた。

「もつと睨んでおくれよ。お前は可愛い。」と、また別の男が其の近くから叫んだ。

「シツ、シツ、シツ。……」

「引き摺り出してしまへ。」

「擲つちまへ。」

こんなことを言ふものがだん／＼殖えて来て、場内は暑さと騒々しさで眼が眩むやうになつた。扇がひらく／＼と、白い花の散りかゝるが如く揺いてゐた。

「擲る、擲るなら擲れ。」



『引き摺り出せるものなら、引き摺り出して見る。』

下卑た口を利くものゝ一組は、五六人も居るやうであつた。

突然、演壇に登つて、房子の側に立つた書生體の男があつた。彼れは興奮し切つた様子で、大きな聲を出した。

『諸君ッ、聴衆の中には東華女學校の間者が入つてゐます。頑冥固陋で、しかも陰險卑劣な彼れ藤島校長は、一團の無頼漢を雇つて、この演説會を攪亂させんが爲めに、本會場へ入り込ませました。』

かう言つた青年の言葉に、會場はいよゝゝ動亂して、下卑た言葉を吐く一組の側では、格闘さへ始まつた。白服帯劔の人が来て、漸く取り鎮めるには取り鎮めたが、職人體の男を二三人退場させた餘波がなほ場内に残つてゐて、何んとなく殺氣立つて見えた。一時三十分になつて、房子は漸く口を開いた。それまで彼女は演壇に突つ立つて海上の波濤を眺めるやうなつもりで、冷かに場内の動搖と喧騒とを見

てゐたのであつた。其の落ち着いたさまには、房子もほとゝ感心した。

『皆さん、わたしたちは、弱い女であります。強くなりたいたい強くなりたいたと考へてゐるのでありますが、第一肉體や腕力の強さからして、到底男子には及びません。其の弱い女の演説を聴きに來て、腕力などを用ひられる方は、花見に長刀を振り廻はすやうなものであります。わたしたちの弱さに同情して下さる方は、どうか静かにわたしたちの申すこととお聴き取り願ひたいと存じます。尤もわたしたちは決して花見といふやうな遊び半分の心で、今日の會を催したのではありません。わたしたちは全く、しんけん血を吐くやうな思ひであります。足かけ五年の間のいそしんだ學校を逐はれたわたしたちは、こゝに立つて同情ある皆さまに、わたしたちの衷情を訴へようとするのであります。どうか腕力や長刀を振り廻はすことだけは御免蒙りたいものであります——』と、低いながらも力のある聲で言ひ出した機智に富んだ房子の言葉は、殺氣立つた會場をば漸く柔らかに平和な氣持に導いて行つた。



さうして彼女は簡明に、しかも公平に、東華女学校の頑冥固陋な態度を、一々例を擧げて報告した上、

「昔しは七尺去つて師の影を踏まず、とか申したさうであります。東華女学校の藤島先生なんぞは、現にさういふお考へを極端に抱いて居らるのであります。わたしたちも決して五年の間教へを受けた師の君に反抗する心は持つて居りません。母校を愛する心は父母を愛する心に變りません。しかしわたしたち婦人の進歩の爲めに、また一般社會の進歩の爲めに前途の大障害になるものは、容赦なく刈り取つて新らしく進むべき道を拓かなければなりません。大義親を滅するとはこの事であります。」と、結んで、満場の拍手喝采を浴びつゝ降壇した。

其の次ぎに、今度の騒動の直接の原因となつた今井幸子が登壇して、「星月夜」といふ題の美しい文章を、朗らかな聲で読みなくすらくと朗讀した上、「皆さん、これはわたしが東華女学校の國語の試験に書いた作文であります。この作文がわるい

と言つて、學校はわたしに放校を命じたのであります。」と叫んだ時は、満場皆この可憐なる乙女に同情して、「暴虐なる東華女學校を破壊せよ。」などと絶叫するものがあつた。成るほど「星月夜」といふ文章の中には、花村芳子を讚美して、それを慕ふやうな文句があつたけれど、それは姉の如くに思ふ上級生に對する憧憬を述べたまでで、學校を攻撃した言葉なんかは一つもないのに、これをば直に大問題にして放校などといふ、女學校にあつては、何處にも殆んど例のない非常處分を行つた東華女學校の神經過敏を晒ふものもあれば、また其の頑冥固陋から來る亂暴さを憤らぬものはなかつた。まだ漸く十七の少女である今井幸子の花の蕾のやうな姿と、其の麗はしい聲で朗讀した美しい文章とは、聴衆の同情を喚び起して、この演說會の効果をば彼女の白い手で、獨り占めに握つたやうに思はれた。

幸子が降壇すると、幸子の父の今井乙彦といふ人が、其の立派な洋服姿を壇上に運んだので、聴衆の中でも知らないものは、これが梶浦法學博士であるかと思つて



拍手したが、今井といふ人は番外として一寸挨拶をしたゞけで、『自分は娘が不當な放校處分を受けたのに憤慨するものであるが、しかし私憤を晴らす爲めに、この會の世話をするものでない。世間では年の行かない娘たちが集つてよくもこんな大仕掛けな運動が出来らるであらう、これには必ず黒幕があるに違ひないと言つて、いろいろの當て推量をするものもありますが、其の黒幕は即ちわたくしで、わたくしは決して何等の私心もなく、たゞ我が女子教育界の前途を憂ふるが爲めに、舊思想の犠牲となつた可憐な少女たちの爲めに、些か微力をつくしてゐるばかりで、差當り資金を募集して、最も自由な、高等女學校卒業程度の女學園を創立し、差し當り東華女學校を放逐された六十二人を收容して、教育したい考へで居ります。黒幕の姿を御覽に入れかたゞのことを報告いたします。』と言つて降壇すると、満場はいよ

いよ熱狂して、即座に自由女學園創立の費用に寄附を申し込む人も多かつた。

次ぎに花村芳子が演壇に立つた時は、流石に人氣者だけあつて、會館が破裂する

かと思はるゝばかりの拍手が起つた。芳子は東華女學校のことなんか、極く簡単に述べたゞけで、直ぐ婦人問題の根柢に突き入り、今日の婦人の社會的地位に就いて、近頃獨學で研究したことを、熱心に述べ立て、『今日の女學校といふものは、いづれも皆男子を本位として造り上げられたもので、男子が女子を追ひ使ふのに都合のよいやうに仕組まれてあります。養鶏場といふものは決して鶏自身の幸福や進歩の爲めに造られたものでなく、人間が卵や肉を奪ひ取るのに都合のよいやうに拵へあげて、産卵鶏だの、肉用鶏だのと勝手な名を命けてゐます。牧場とても其の通りで、あの青々とした草地は、決して牛や豚の幸福や進歩の爲めに廣々と存在してゐるのではなく、矢張り乳や肉を人間に供給することが本位となり中心となつて居ります。少し過激な比喩かも知れませんが、わたしは今日の女學校の校舎や運動場を見ると何んだか養鶏場や牧場を思ひ出してなりません。良妻賢母といふ男子本位の言葉は産卵鶏とか肉用鶏とか愛玩鶏とか、或はまた乳牛とかいふ言葉によく似てゐるやう



な気がいたします。どうしてもこれは女子の進歩と女子の幸福とを中心にした女學校、男子の束縛干涉から全然放たれた女學校が出来るとは、一つの東華女學校がなくなつても、直ぐに第二の東華女學校が出来ればかりでなく、總べての女學校は皆東華女學校の妹として、動もすれば姉さんの眞似をしかゝつて居ります……。」と興奮して述べて來ると、満場は水を打つたやうに静かで、人々は皆凄しい顔をして聽いてゐた。

「ノー、ノー。……危険思想。」と、一隅から叫んだものがあつた。

### 三十一 公園で晚餐

芳子はそのなことに頓着なく、なほも進んで、自分の信ずるところを述べようとしたが、不圖演壇から五つ側目あたりの腰かけに、父母と妹とが並んでゐるのを見

出して、急にさまりがわるくなり、言ふこともしどろもどろに、危く結論を見出して、演壇を下りてしまつた。すると、演壇の横手の樂屋のやうな一室へ、警察の人が來て、今井さんと話をしてゐたが、芳子を見ると、鋭く睨み附けた。

「今も會主にお話したんですが、一體この會は學術演說會の名義になつてゐるのですから、今あなたの言はれたやうな過激な説をお述べになると、こちらでも相當の取締りを加へなければなりません。これも不本意だし、わたしも別に臨監の資格で來たのぢやないんで、婦人の演說に中止を命ずるのも不穩ですから、這度限りは黙過しておきますが、これからはどうかもう少し穩かにやつてくれないと困りますね。」と諭すやうに言つた。芳子は何んだか、其の態度が氣に入らないので、むつとして。

「わたしは別に不穩とも過激とも思ひませんでした。平生考へてゐることを言つたばかりです。それが悪いのなら御隨意になすつたら可でせう。」と、膠もなく言つた。



「お考へになるのは、あなたの勝手ですが、それを公衆の前に発表なさるから、警察として、相當の處置を執らなければならぬです。警察の方では好意を持つて御注意をしてゐるんです。それでいけなければ別に方法がありますからね。」と、金線のある肩章を附けた人は、細身の洋剣をがちやがちや音させながら、脅かすやうに言つた。

「わたしは、あなたの好意によつて、自分の信ずるところを曲げようとは思ひませぬ。これからでも機會さへあつたら、正直に信ずることを述べますから、あなたの方でも、其の相當の處置とかいふものをお執りになつたらいでせう。」と、芳子は事の行きがかりから、平生の溫和しさに似ず、何處までも反抗的の態度に出た。何を生意氣な。………と言つたやうな冷笑をよく肥えた圓顔に浮べて、洋劍の人は、「ふん」と鼻先で笑つた。さうして、「よろしい、承知しました。これからあなたを本廳の黒表を加へて、相當の取締りをしますから。」と、またも脅かすやうに言つた。

に言つた。

「そんなことは、あなたの方の御勝手です。何もわざわざわたしに言はなくつたのでいでせう。」と、芳子はツンとして横を向いてしまつた。

「花村さん。」と、今井さんは、芳子に目配せをして、こんな人と争ふのは不利益だからといふ注意を、顔に現はした。芳子は領いて窓の方へ行つてしまつた。表にはまだ入場し切れなかつた群集がわい／＼騒いでゐるらしかつた。演壇では梶浦博士が得意の柔かな口調で、談話體に生物界の兩性といふやうなことから説き起し、人間の結婚制度の歴史や現在社會の男女關係を説き、婦人の解放から自由戀愛、それから將來社會の男女關係に説き進めて、いろいろの例を引き、其の間に時々東華女學校のことを巧みに挿み込んで、靜かに聴き惚れてゐる聴衆をば、考へさしたり笑はしたりしてゐた。

梶浦博士は芳幸會に多大の同情を寄せ、今日の演說會にも喜んで出席して下すつ



たので、今井さんの主唱で近々設けらるゝ、自由女學園の園長といふやうなものには、梶浦博士を頂かうといふことになつて、博士の内諾を得た。

演説會は四時半頃に無事閉會した。關係者一同は、梶浦博士を中心に卓子を圍んで、紅茶を啜りながら、いろ／＼と話をした。博士を初め、今井さんも、房子も幸子も、口を揃へて、今日の芳子の演説の上出来であつたことを譽め立てたが、

「それにしても、おしまひの方になつて、急に氣抜けがしたやうに、ぶつとりと尻切れ蜻蛉になつたのは不審だ。」と、遠慮のない今井さんが批評したのを、皆々同感だといふ顔をして、笑ひながら頷いた。

「どうなすつたの、ほんとに、わたしあの時急に御病氣にでもおなりになつたのではないかと思つて、喫驚しましたわ。」と、房子は言つた。房子は司會者の席に着いてゐたので、一番よく芳子の演説が終りに近づいて急に頓挫した模様を見てゐたのであつた。

「だつて、父が母と妹と三人で直ぐ前のところに並んで聽いてるんですもの。今日聴きに來るといふことが分つてましたら、初めから其のつもりで居たんですが、何んとも言はないで、こつそり來てるんですもの。わたしほんとに驚いてしまつて、お喋舌も何も出來なくなつちまつたの。」と、芳子が正直なことを房子に言つたので、梶浦博士も今井さんも皆々一時に哄と笑つた。

「無頼漢が妨害をしても、警察の干渉にも決して驚かない女丈夫でも、兩親の前には閉口するものと見えますね。」と、謹嚴な博士は、珍らしく冗談を言つて芳子を冷かした。

芳子たちが會場を出たのは、もう夕方であつたが、長い夏の日、月のやうな色をして、まだ西の空にあつた。皆ちり／＼に電車へ別れ乗つてしまつたのに、芳子だけは、どういふつもりといふわけでもなく、唯一人ぶら／＼と歩きたかつたので、神田橋の袂まで歩いて來た。すると、電車の交又線のところで、突然何人かに



背中を叩かれた。驚いて振りかへると、青木一郎が真つ赤な顔をして立つてゐた。健康な色艶をした圓い頬に、あか／＼と西日を受けたので、餘計に赤く見えたのかも知れなかつた。

「芳子さん、今日の演説は上出来だつたね。」と、一郎は嬉しうにして言つたが、「でもをしまのところが少しまごついたやで變だつたぜ。」と笑つた。

「さう。」とだけ言つて、芳子は成るべく一郎に口を利くまいとした。一郎は芳子の様子が變なのに氣がつかぬ風で、

「僕の阿母さんが、こなひだ芳子さんとこへ行つたんだつてね。僕はちつとも知らなかつたんだが、今朝になつてさういふんだよ。僕が出かけようとする、何處へ行くと訊くから芳子さんの演説を聴きに行くと言つたら、こなひだ用達しに出た序に、芳子さんのお家の前を通りかゝつたから、一寸お寄りしてみたと云ふんだが、どうもさうぢやなさうなんだよ。わざわざ支度して出かけて行つたらしいんだが、

何か詰まらない話でもしやしなかつたかね。」と、一郎は氣がかりな様子で問ひかけた。

「わたしよく知らないのよ。丁度東華女學校の方が五人も来てゐらしたんで、お目にかゝらなかつたんですもの。」と言ひながら、芳子はいつの間にか一郎とこんな口の利さかたをするやうに親しくなつてゐたのに今更驚くとともに、一郎が全く縁談のことで其の母を自分の家へよこしたのではあるまいか、それとも白ばくれてゐるのであらうかなぞと、頻りに考へた。

二人は神田橋を渡ると、電車道避けて右の方へ曲つた。其處は大きな倉庫らしい家と、高い塀との間を稻妻形に行く可なり廣い路であるが、人通りの極く掛ない寂しいところであつた。

「芳子さんは、矢つ張り獨身主義なの。」と、其の寂しい路の真ん中で、少し聲を震はしつゝ一郎は言つた。



「矢つ張りつて、……………つひこないだちやありませんか、わたしが獨身主義をあなたに發表したのは。……………そんな重大問題が、一ヶ月ぐらゐの間に變りやしないわ。」と、芳子は笑ひに紛らして、何氣なく答へた。

二人は其のまゝ、肩を並べつゝ、黙つて濠端の老いた柳の下を通り、向うの端を歩いてゐる人の姿が豆のやうに小さく見える廣い道路を、宮城前の方へ來かゝつた。芳子からも話さなければ、一郎からも物を言はなかつた。しかし二人の肩はすれすれになつて、麥稈帽に白地の單衣、小倉の袴の一郎と派手な棒綯の明石に紹の丸帯を締めた芳子とは、夫婦にも見えないけれど、しかしお嬢さんが書生を連れてゐるとも思へないで、蜜のやうに甘い戀を囁く、相愛の間柄といふことを疑ふものはないやうであつた。行き逢ふ人はじろくくと見て行くし、間斷なく往來する自動車は道路の廣いのに任かせて、全速力で飛び去るが、意地のわるい運轉手は、わざ／＼轆を芳子達の方へ向けて來て、はらく／＼させるほどの近さを掠めて行くのもあつた。

「失敬な。」と叫んで、一郎は自分たちに埃りを浴せつゝ、駈け去る自動車のお尻を睨んでゐた。

二人は日比谷公園へ來て、折柄奏樂のある音樂堂の下の、賑かな中を通り抜け、園内のレストラントで、一緒に晚餐を取つた。

### 三十二 黒いリボン

其の月の末には、また芳子が一郎と二人で千葉の寒川海岸に漁夫の家を訪うて、中山女史の遺兒琴子の養育料をお内儀さんに渡した。

「おツ母ア、またあの人が來たよ。」と、琴子は二人をよく覚えてゐて、卑しい言葉でかう言つた時、芳子は何んだか哀しいやうな氣持ちがした。かうして今まで日蔭の身として育てられて來た琴子を憐れむと、もに、亡き中山先生が自分の生み落し



た子をば、公けに發表することの出来なかつた苦惱に同情し、またさうした偽りの世を呪ひたくなつた。今朝出がけに見た新聞の第一面には、中山先生が臨終の前に遺言状まで作つて、決して出版してくれぬなといふ意思を表はした全集の廣告が、いよ／＼其の第一巻の製本の出来たといふことを大きな字で掲げ出してゐた。生涯童貞の生活をした最も潔らかな大女流作家といふやうな文字も見えてゐた。芳子は世間といふものが、どんなに個人の意思を虐待し且つ壓迫するか、或る一人の人間をばまるで違つたものにして後世に傳へるかといふことに就いて、深く考へないではゐられなかつた。歴史といふもの、全く當てにならないといふこと、豊臣秀吉でも徳川家康でも、たゞ其の人々の残した骨組みに後の人が勝手な着物を着せたので、ほんたうのものはまるで違つてゐるであらう。其の骨組みの中へ、今の人の心を吹ゝ込んで、好きなやうに踊らせるのが近頃はまた流行してゐる。いづれにしても、當てにならぬものは世間で、當てになるものは自分一人だ。……芳子はさう思つて

ヂツと考へてゐた。

主人の漁夫は二三日も前から、舟に乗つて東京灣の真ん中へ漁に出たといふことで、お内儀さんが琴子と二人で留守をしてゐた。海が静かだから、漁村一體に男は皆海に浮んで、どの家にもこの家にも女と子供とばかりが残つてゐた。

今度は前觸もなく來たので、家の内は前よりもズツと汚なかつた。麻の座蒲團の用意もなく、花塵の新らしいのを一枚敷いて、お内儀さんは二人の坐り場所を設けた。番茶が出てお茶うけには例の蟹の足が赤く皿に盛られた。

「奥さん、さアどうぞ、こつちへ坐らつしやいませ。そんな汚ないところぢや、お衣類がよくれますよ。」とお内儀さんは言つたが、花塵の上へは一郎が先きに坐つてしまつたので、それに並んで臺の上に載つたお雛さまのやうになるのは厭やであつた。それで、正面の机の前に進んで、相變らず線香の烟りの絶えない中山女史の寫真に『先生、まゐりましたよ。』と言つて、お辭儀をすると、ありし日の女史のこと



がいろ／＼に思ひ出されて来て、熱い涙に臉が濡れた。

「これから勝浦へ行つてみようか。」と、一郎は背後を顧みて芳子に言った。芳子も何んだかもう一度勝浦へ行つて、中山女史の亡なられた土地の印象を深く攫んでみたいと思つたので、

「さうね。」と、八分通り承諾の意を表はした。

「おッ母ア、あたしも連れてつてよう。」と、琴子はお内儀さんにせがんだ。

「連れて行つて上げませうね。」と、芳子は言った。琴子を連れて行つて中山女史の亡なつた土地を見せるといふことは、女史の靈魂を慰めるのにこの上もないことだと思つたからであつた。遺言状で表明された女史の希望の大部分を自分たちの力で實行することの出来なかつたのを、女史の靈魂に對して済まないことだと思つてゐる芳子は、責てこんなことでもして、申し譯の一つにしたいと考へたのであつた。「連れて行つて頂くんなら、もつと綺麗にして、東京のお嬢さんにならなげやなら

ない。」と、お内儀さんは嬉しうにして琴子を裏の方へ連れて行つたが、ヒリ／＼と痛くなるほど洗つて磨いたと見え、やがて琴子は赤く擦り剃けたやうな顔をして出て来た。

「さア、わたしがかんかんを結つて上げませうね。」と言つて芳子は琴子の亂れた頭に髪に手をかけた。

「厭やだ、かんかんだつて。」と、琴子は笑つた。かんかんなどといふには、もう少し大きくなり過ぎてゐて、琴子にはそろ／＼性の理解が出来かゝるほど、ませてるどころもあつた。

芳子は手早くお垂髪を拵らへて、「リボンがあるの。」と訊くと、琴子は「あるよ。」と言つて、奥の納戸から大きな白いボイル函を持つて来たが、其の中には赤いのや白いのや海老茶のや、いろ／＼のリボンがドツサリ入つてゐた。

「みんな、東京の阿母さんから頂いたんだね。……この五月頃お亡なりになる前に



「も頂きましたよ、黒いのをね。」と、お内儀さんは悲しさを言つて、ボール函の側へ寄つた。

「これかね。」と、琴子は言つて、底の方から黒いリボンを取り出した。

「さ、のね、これ！……………これにしませうね。」と、言つて芳子は其の黒いリボンを手にしつゝ、感慨の深い様子をして眺めてゐたが、其の眼からは涙が流れて、熱い雫がほたもと亡き女史の琴子に對する贈り物の上に落ちた。

「姉さんが泣いてるよ。」と、琴子は呆れた顔をして言つた。

「さア、いゝ衣類を着るんだね、琴坊は。」と、言つて、お内儀さんは煤ばんだ桐の重ね箆の一面に鐵の金具の打つてある抽斗を開けて、「奥さん、どれにいたしませうかね。琴坊には阿母さんに拵へて頂いた着物がドツサリあるんで、わたしにはどれを着せたらいいか分らない。奥さんに見立て、頂かなければ。」と言つた。

手提袋から白粉と刷毛とを出して、琴子に化粧をしてやつてゐた芳子は、琴子の

顔の稍美しくなつたのを、つくづくと見てから、箆の方へ行くと、成るほど其の抽斗には琴子の夏物ばかりが入つてゐた。

明石の單衣の派手な縞物と、鹽瀬の片側帯を二つに折つて丸帯にしたの取出し、縞絆から何から一通り取り揃へてちやんと着更へさせると、琴子は流石に見ちがへるほど美しく、都振りの姿になつた。お堅に結んだ帯の恰好を眺めつゝお内儀さんは涙くんだ。

「阿母さんに一目見せたかつたね。」

さう言はれても、琴子はけろりとして、珍らしく美しい着物に包まれた身體を、嬉しさを手に持てあましてゐるといふ風であつた。

### 三十三 尾行される



勝浦では、山も海も白帆も、總べて芳子と一郎との眼には意味深く眺められた。丁度あの宿の番頭が、停車場へ客を迎へて出て来たので、直ぐ自動車で三階の家へ送り付けてくれた。宿は殆んど満員で、空室のなかつたのを漸く都合して二階の一室へ入れてくれた。其の室は涼しかつたけれど、海が見えなかつた。初めて二階といふものへ上つた琴子は、珍らしさうにきよろしくしてゐた。二人は三階を仰いで、あの悲しい思ひ出の室を眺めようとする、其處の欄干に凭れた藝妓らしい女は、突と二人で笑ひながら、此方を見下ろしてゐた。

「あなたの阿母さんは、彼方に見えるあの白い西洋館でも亡りになつたんですよ。」と、一郎は琴子に病院の白堊を指さして見せたが、琴子は矢張りけろりとしてゐた。三人とも浴衣に着更へた。お腹が空いてゐたので、午飯とも晚餐とも附かぬ御飯を喰べてから、海岸の方へ行つて見たが、風はないけれど、波は例によつて高かつた。寒川で入海の穏かなのばかり見てゐた琴子は、生れて初めて、波の荒い大洋を

眺めて、喫驚した様子であつた。

海岸を歩き廻つて、またあの小山の上のお宮へ行つて見た。何んだかあの三階の宿に中山女史が三人の歸りを待つてゐるやうな氣がしてならなかつた。

「此處へ來ると、中山先生が亡なつたとは思へないね。」と、一郎も感慨の深さうな顔をして言つた。

「かうして此處に二人で立つて海を眺めてゐるところへ、宿の番頭が來て、先生が急におわるくなつたと言つたんでしたね。」と、芳子は二月ほど前の追懐に耽りつゝ言つた。

「あの時、琴子さんを此處へ連れて來て上げたかつたね。」と一郎は遙かに沖の方を通る汽船の烟りを眺めつゝ言つた。この前二人で此處に立つた時も、丁度あんな汽船が沖を走つてゐたのであつた。

「だつて、先生の秘密を、わたしたちはちつとも知らなかつたんですもの。先生が



御病氣におなりにならなかつたら、この秘密は矢張り其のまゝの秘密で、わたしはちはまるで何んにも知らなかつたんでせう。世間といふものは妙なものです。何故秘密なんか要るんでせう。」と、芳子は考へ／＼言つた。

「秘密は人間にだけあるもので、動物にも神さまにもないことだよ。神祕なんて言ふが、あれも矢つ張り人間から見ても秘密だよ。秘密のあるのが人間の弱點ともいへるが、人間の面白味はまた其處にもありますね。」と、一郎も考へながら言つた。

「ぢや、あなたにも秘密があるの。」と、芳子は、一郎の顔を覗き込んだ。

「大にあるね。」と、一郎は澄まし込んでゐた。琴子はお嬢さんらしくもない大きな欠伸をした。

其の夜は勝浦で泊つて、三人は翌る日朝早く汽車で寒川まで来て、琴子を漁夫の家へ送り届けた。主人はまだ海の上から歸つてゐなかつた。十日ぐらゐ灣の眞中に漁舟を漂はして、魚を捕るのであるが、其處へ捕つた魚を買ふ船も、食料品を賣

る船も皆集つて来て、海の上で市が立つのだといふことであつた。

東京へ歸つてから二三日すると、或る新聞には驚くべき記事が出た。それは新々婦人の先驅として有名な花村芳子には大學生の情夫があつて、女の私生兒が千葉縣の或海岸に預けて有といふ事を、嘲笑的に面白可笑しく、長々と書いた物であつた。其の材料の出所はどうも警察の方に有らしく、××會館であの事があつてから、芳子にはずつと刑事巡査が尾行してゐたのを、芳子は少しも知らなかつたのである。芳子の崇拜者は、洪水の堤を切つた如く、どつとばかりに芳子の家へ押し寄せて来て事の眞偽を質した。

### 三十四 母の言葉

芳子は自分の身體へ不意に纏はつて来た忌はしい風説に對して、別段深い辯明も



しなかつた。千葉の海岸に私生児が預けてあるなぞと、眞實しやかに書き立てた悪徳新聞に對しても、一片の取消申込書をさへ送らなかつた。わざ／＼眞偽を尋ねに訪問して来た人には、「餘りに滑稽な風説で、一笑にも値ひしない。」と。至極簡単に答へて、それ以上多くを言はなかつた。さうして火のないところに煙は揚らない、中山先生の遺児琴子をば青木と一緒に千葉寒川の海岸に訪ねて、勝浦へまで同行したことが、見え隠れに尾行して来た刑事調査には、芳子に情夫があつて私生児まで産んでゐると見えただのであらう。琴子の年齢と芳子の年齢を考へ合はせたなら、琴子が芳子の子ではない、芳子の子であるとすれば八歳ぐらゐで生んでゐなければならぬ勘定になる。こんな簡単なことさへ判断し得ない刑事調査とやらいふものも頭がわるいなアと、芳子は微笑んだのであつた。しかし青木をば情夫と見る眼に無理はないと、寧ろ刑事調査とやらに同情したくなつた。男と女とが一緒に居れば、必ず異様の眼を光らさずにはおかぬ世間並の人心の愚かさを嗤ふよりほかに、それに

對しては何んとも言ひやうがなかつた。

深く芳子の爲人を知つてゐるもの、若しくは、最近數年來の芳子の日常を見てゐるものは、芳子が私生児なんぞを持つてゐないと確信してゐるし、また妊娠を秘密にして、こつそりとお産の紐を解くには、どうしても五ヶ月や六ヶ月は何處かに世を忍ばなければならぬが、芳子はこれまでまだ一週間とつゞけて外泊したことはない。この一事でも私生児云々の虚報は明らかだと、隣り近所の人々は皆悪徳新聞の虚報を笑つてくれた。

しかし、中には其の虚報を信じてゐる人のあるのもよく分つてゐた。半信半疑の人も可なりにあつた。さういふことを言へば必ずわるい方へ考へようとするのが一般の人情でもあつた。そんな人々に對しても、芳子は別段くはしく辯明しようとは思はなかつた。

『私生児があつたつて、別に一大事でもないでせう。女が子を生むのは當り前のこ



とですもの、男が子を生んだら、それこそ一大事ですけど。」と、芳子は其の悪徳新聞の記者を調弄つた。そんな虚報をば面白半分、しかも中傷的に新聞へ出しておきながら、其處の記者はづう／＼しく芳子を訪問して、「お嬢さんにそんな汚らはしい行爲があらうとは信じませんが、……」などと白々しいことを言つて様子を窺ひに來たのであつた。「信じない事を、あなたは新聞にお書きになつたんですか。」と、反問してやりたかつたのを、芳子は堪へて、皮肉に嘲弄つたのであつた。其の翌日の悪徳新聞には、またこの芳子との會見記を載せて、著にも杭にもかゝらぬづう／＼しい棄鉢女だとしてあつた。

芳子は自分の身體に纏はる汚名を雪いで、自ら清くするには、勢ひ中山先生の秘密を世の中に晒さなければならぬのを考へて、ヂツと辛抱してゐたのであつた。先生は其の遺言に於て、其の秘密を世間に發表すると否とを芳子と青木とに一任し、もう決して包み隠しはしないと云はれたけれど、しかし芳子は中山先生が其の短か

い生涯を通じて、ずうつと黒幕の中に包みおほせた秘密をば、今更自分の都合の爲めに明るみへ引き出すに忍びなかつた。それもいづれ琴子が世に出る時には、明らかにしなければならぬことであるが、自分の都合の爲めに先生の秘密をさらけ出し、延いて琴子の身の上にまで難儀がかゝつて、中山先生に依託されたことも實行が出来ないといふやうなことになるれば、地下の先生に對して申譯がない。こゝは自分一人に對する悪聲などは、聞く人の判断に任せることとして、自分では一言の辯解もしないと、芳子は固く決心したのであつた。

「お前、あんなことを新聞に書かれて、どうするつもりなの。わたしほんとに、御近所の方にもきままりがわるくて、なりつたけお目にかゝらないやうにしてるんだよ。」と、母親は突然芳子の背後へ來て、机に凭れてゐる芳子の白い頂を覗き込むやうにしながら言つた。

「阿母さんは、氣が小さいのね。」と、芳子は振り向いて、にっこりした。矢張り母



とかうして二人である時、芳子は言ひ知れぬ温かみを覺ゆるのであつた。しみじみ懐かしいと思ふのであつた。

『わたしは、どうしても、お前のやうに大膽になれないよ。昔し人間だからね。』と母親の顔には、何んとなく厭や味の色が浮んでゐた。

『それに磯子が可哀さうでね、昨日も學校のお友達に途中でお目にかゝつたら、あなたの姉さんは大變ね、と言つたきり、さもしく侮辱したやうな顔をして、ついッと行つてしまつたんだつて。九月になつて學校へ行つたら、皆さんからいろ／＼のことを言はれるだらうつて、心配してゐるぢやないか。』と母親は苦々しさうな顔をして言つた。

『だつて、阿母さん、別に辯解の仕様もないぢやありませんか。』と、芳子は事もなげに言ひながらも、自分は兎に角、自分のことから、母に餘計な心配をかけたり、可愛い妹に世間の狭い思ひをさせたりするのは、たまらないと思つた。

『お前、ほかのことは兎に角、子供を生んだなんて言ふことは、何んとかハツキリ辯解して、一人だつて疑ふものがないやうにしたいものだね。』と、母親は眉を擡めた。

『お医者さんに體格検査をしてもらつて、妊娠も分娩もしたことがないといふ證明書を新聞にでも廣告しませうかね。』と芳子はまたにつこり笑つた。

『どうしてお前は、さう暢氣にしてゐられるね。』と、母親は泣き顔をして言つた。父親は磯子を連れて、昨日から横須賀の先きの大津といふところへ海水浴に行つてゐるし、女中の澤は兄が上總の九十九里濱で水泳中行方不明になつたといふ電話が先刻かゝつて来て、親の家へ歸つたし、廣い家は芳子母子の二人きりでひつそりしてゐた。二三日絶え間もなかつた來訪者も、今日はまだ一人も來ないので、取り次ぎにはわたしが出ると言つて、着物まで着更へた母親は、少し拍子抜けがしたのであつた。



「それぢや、阿母さんは、どういふ風にして辯解すればいゝと仰しやるんです。」と芳子は稍開きなほつたといふ調子で言つた。

「どういふ風にしてつて、……」と、母親は言ひ淀んだが、

「青木の一郎さんと早く婚禮をして、披露するよりほかに工夫がないぢやないか。

さうすれば、自然に私生兒なんぞのないといふことも、世間に分ると思ふがね。」と、思ひ切つた様子を見せて言つた。

「青木さんと婚禮？——阿母さんはまだそんなことを考へてらつしやるの？」と、芳子は愛らしい眼を圓くした。

考へてつてお前、女と男とが二人つきりて旅をして……」と言ひかけて、母親はまた少し言ひ淀んだが、「……宿屋へ泊つて來れや、もう夫婦も同じぢやないか。

お父さんだつて青木の小母さんだつて、其のつもりで、お前たち二人に旅行をおさせになつたんだものね。」と、言ひにくさうにして言ひ足した。

「まあ。……」と、芳子は呆れた。さうして、「わたしと青木さんと一緒に旅をしたのは、今度が初めぢやありませんわ。」と、呟くやうに言つた。

「でも、二人水入らずで、泊つて來たのは、今度が初めだらう。」と、母親はなかなか承服しなかつた。

「男と女とが親しく交際するか、一緒に旅行をするかしたら、きつと夫婦關係……醜關係があるやうに思ふのは悪い癖ですね。」と、芳子は昂然として言つた。

「理窟はどうでも、日本ではまだ仕方がないよ。昔しから瓜田の沓とか言つてね、本人が幾ら何んとかかとかか理窟を捏ねても、世間が承知しないからね。」と、母親も今日はなかく負けてゐなかつた。

「其の解らない世間を征服するのが、わたしたちの一生の仕事だと思つてますわ。」と、芳子も言葉に力を籠めて言つたが、其の意味は母親に通じないらしかつた。

「若いうちは、何んとても生意氣の言ひ放題だが、年を取ると後悔しますよ。わた



しだつて、お前の眼からは、仕様のない、時代おくれの古臭い人間に見えるだらうが、これでも女學校へ行つたんだし、お前くらの年頃には、獨身生活だとか、洋行するとか、いろいろのことを言つたものさ。學校の英語の先生でアメリカから來てゐたミス・ポイントンといふ人が、わたしを可愛がつて、是非アメリカへ連れて歸りたいといふし、わたしも隨つて行きたくて、お父さんや阿母さんに頼んだが、どうしても許してくれないので、逃げ出さうとして、捉へられ、三日ばかり泣きつづけたことがあるからね。だけど今から想ふと、曾夢だよ。まだ固まらない若い時分の考へは随分危いものだからね。丁度井戸側のない井戸の縁に立つて、にこ／＼笑ひながら井戸の底を覗いてる赤ん坊みたいなものだね。大人の眼から見れば危くして仕様がなから此方へおいでと言つても、なか／＼來ない、そこで引つかへて連れて來ると、わアと泣き出すが、其の赤ん坊が大きくなつてから其の話を聞いたら、わアと泣かされたことを感謝するに違ひないからね。……まア若い時分の考へ

といふものは、其の赤ん坊のやうなものだよ。それに女は誰れでも若いうちは皆人氣者でね。何をしても世間がやんやと囃し立てるが、年を取ると、さうは行かないよ。卒塔婆小町の話でも分るやうに、女は何んでも年頃のうちに身を固めないといふはじめなことになるからね。』と、母親はしみ／＼お腹の底から絞り出すやうな聲で言つた。芳子は太抵版に刷つて捺したやうに、言ふことがきまつてゐるこの時代の人の尤もらしく分別くさい言葉と、自説に都合のよいやうに比喻を濫造することを一々反駁するほどの價值もないと思つて、可笑しくなつたが、しかし自分のことを心配してくれる母親の眞心だけは感謝したいと考へた。さうして母親を相手に時代思想や婦人問題の議論をしても詰まらないのは分り切つてゐるけれど、今の女學校なるものが、この中老の母親をば生徒として教育した時代に比べて、何ほどの進歩もしてゐないのに今更呆れかへるばかりであつた。さうして今度芳幸會の手で發企された自由女學園が自分たちの理想通りに成立して、高等下女製造所のやうな現在



の女學校を、片ツ端から追ひまくることの愉快を思ふと、身體がぞく／＼して來た。

### 三十四 血書の手紙

母親はまだ何か言ひたさうであつたが、何を言つても、芳子が微笑んでゐるばかりなので、拍子抜けがして、口をもぐ／＼させながら黙つてしまつた。其處へ表に『郵便ツ』と叫ぶ聲がしたので、芳子は母が立たうとするのに先んじて、玄關へ出ると、紺の剝げた小倉服の脊中に汗の浸染んだ配達夫の後姿を見ることが出來た。

土間に落ちてゐた封書は、聞いたこともない名前の人からのので、『松崎二郎』としてあるのが、赤黒い變な色で、何んとなき氣味わるく見られた。妙に腥いやうな感じを覺えたけれど、芳子はまだ其の時はそれ以上に考へが走らなかつた。

名前だけで、處書のない封書を指の先きに摘まんで、芳子は氣味わるさうに、自

分の居室へ持つて來た。其の封筒は素人細工に美濃紙で拵らへたもので、いびつに曲つて、御飯粒が原形のまゝこびり附いてゐた。

『また狂人かい。』

母はもう得體の知れない人から來る芳子への手紙に慣れてしまつてかう言つた。

『え、でもこれは大分變つてゐるわ。』と言ひ／＼、芳子は汚い物でも持つたやうにして、其の封筒の先を摘まんでゐたが、見てゐる内に、段々と其の手蹟に惹着けられるのを感じた。封筒の中に電氣でも仕掛けてあるやうに、芳子の手は封筒をばねと抱き締めさうになつた。芳子は殆んど夢中で、封を切つた。すると内部から出たのは、昔し風の巻紙へ、矢張り赤黒い字で、ベタ／＼と大きく書いたものであつた。

『これは僕の血です……。』

最初に芳子の眼に映つたのは、この一句であつた。芳子はハツとして、手紙を取り落しさうになつた。よく血で書いた手紙とか、血で書いた意見書とか言ふもの、



あることを聞くが、實際血で書いた字を見たのは、芳子にはこれが初めてであつた。東華女學校に反抗した芳幸會の同盟退學書で六十餘人の血判を見た時も、いゝ加減氣味がわるかつたが、全部血で書いた字を見るのはほんたうに今が初めて、其の氣味のわるさは筆の軸を捺したくらの小指の先きの血判の比ではなかつた。しかし芳子は血で書いた其の手紙を棄てようとはしなかつた。頻りに起る心の感動を抑へつゝ、讀みつゞけた。

僕の血です。額の血です。指先きの血などではありません。僕は小學校にさへ碌に通はなかつた今年十九の無教育の青年です。僕のやうな者があなたに手紙を出したからとて、封のまゝ棄てしまふであらうと思つて、今までは辛抱してゐましたが、兎ても駄目です。どうしても辛抱がしきれないので、額の血を絞つてこの手紙を書きました。かうすれば、あなたがきつと封を開いてくれるであらう、讀んでくれるであらうと思つたからです。芳子さん（かう呼ばして

下さい。見もし知らぬものが失敬など、あなたは怒るでせうが、かう呼ぶと僕はもうこのまゝ死んでも生甲斐があつたと思ふのです。僕はあなたの崇拜者です。僕はあなたと同年か或は僕の方が一つ上かとも思ひますが、年にかゝはらず、僕は姉のやうな、或は母のやうな氣がします。こんなことを言へば、あなたは驚くでせうけれど、僕は實際この廣い世界に、一人も崇拜者がいないんです。これまで、人間が人間を崇拜するなんて馬鹿なことだと思つてゐました。しかしあなたが出たのは日輪が東の空に現はれた如く僕の世界を明るくしました。僕はもう何の遲疑することもなく、あなたの前に跪づくのです。芳子さん（クリスチャンが神に向つて、「神よ」と呼ぶが如く、僕はこの「芳子さん」と呼ぶことによつて、どれだけの親しみと懐かしさを感じてゐるでせう。僕はあなたを崇拜します。崇拜するといふよりほかに、何んの言葉もありません。僕はあなたといふ一人の婦人から或る力を得て、これから一生懸命に或る



仕事に取りかゝります。僕のこの仕事が成就すれば、僕もあなたと並んで世界を照らす二つの輝きにならうと思ひます。あなたが太陽ならば、僕も月ぐらゐの光りを發するであらうと思ひます。この一事が成功した後、僕はあなたを訪問したいと思ひます。それか三ヶ月の後か、半ヶ年の後か、また一年の後か、十年の後か、到底今からはわかりません。それまで僕はあなたにお目にかゝりません。さう決心してゐますので、僕は新聞雜誌に出たあなたの寫眞も成るたけ見ないやうにしてゐます。演説會にもそれが爲めに出かけなかつたのです。僕があなたにお目にかゝる日は、僕の仕事の成就した日です。さらば御健康に。

世界で唯一人の男

松崎二郎

世界で唯一人の女

花村芳子様

芳子はこの手紙を縁側へまで持出して、明るい光線に血の色を透かしながら、幾度も繰返しく讀んだ。今まで随分いろくの手紙を受け取つたけれど、まだ一通もこれほど強く芳子の心を惹き付けたのはなかつた。中には碌に讀まないで、屑籠へ放り込んだのもあつた。東華女學校の卒業式にあの事があつてから、殆んど毎日々々来る手紙を集めておいたら三百通以上にもなつたであらうが、現に芳子の手元には、ほんたうの同情者から來たのか、しみく〜と意見を述べ立ててくれる人から來たのか、其の二つの種類を限つて、十通ほどしか保存してない。それも多くは皆婦人の方からので、男子からの手紙にはどうも厭やなところがあつて直ぐ破り棄てたいやうなものばかりであつた。しかしこの松崎二郎と名乗る青年からの手紙は、保存しておいてよいものゝやうに、芳子は何んだか初めから直覺してゐた。さうして讀めば讀むほど、眞率なところがあると思はれてならなかつた。誇大妄想といふべきところはあつたが、それも芳子の氣に入つた。



これまで、男子からの手紙と言へば、必ず親しく交際をしてくれとか、友人になつてくれとか、中には何日に何處その公園で待つてゐるから来てくれとか、可なり失敬なことまで書いたのが、多いといふよりは、九分九厘までさうであつたのに、この松崎二郎といふ青年は、さういふことを少しも言はない。企てゝゐる事が成功するまでは逢はないといふ其の心柄が、ひどく芳子の氣に入つたのであつた。返事を書いて、企てゝゐる仕事の何であるかを問うてみたいやうな氣さへして来た。

「また狂氣の手紙かい。根よくそんなものをよく見てるね。」と言つて、母親は足に痺れを切らした風で、よろけながら立つて来て、芳子の披いてゐる血書の手紙を覗き込んだ。

「阿母さん、一寸これを見て御覽なさい。」と、芳子は其の手紙を母親の眼の前へ出した。母親は何んの氣なしに受け取つて見て、初めの一句を見ると、「まア厭やだ。」と言つて、手紙を縁側に取り落した。颯と吹いて来た青あらしが、簾を捲き上げて、

手紙はひら〜と庭へ舞ひ飛んだ。

「あらッ。」と言つて、芳子は跣足のまゝ庭へ下り、あはや泉水の中へ落ちやうとしてゐる血書の手紙を拾ひ取つた。

「そんなものお前、汚くて氣味がわるいちやないか。」と、母親はさも〜大事なもの、やうにして、手紙を持つてゐる芳子の白い手を見詰めた。

「まア阿母さん、一寸これを讀んで御覽なさい。眞面目に書いてありますよ。」と言ひ〜、芳子はまた母親の眼の前へ其の手紙を出した。

「血で書いたなんて、氣味がわるいちやないか。」と、母親は厭や〜ながらといふ手付きで、其の手紙を受け取つて、「お前、これは血だか何んだか分りやしないよ。紅に墨を混ぜると、こんな色になるよ。」と、嘲笑ふ風で、手紙を讀み下した。

「狂人も狂人、これはお前大狂人だよ。」

母親は一通り讀み終ると、其の手紙を引き破りさうにした。芳子は「あッ阿母さ



ん』と叫んで、手紙を取り戻し、皺になつたところを、膝の上で丁寧ていねいに押し伸ばした。『大層お前、大事だいじにしてるんだね、そんなものを。』と、母親はさも不思議ふしぎさうな顔をした。

『大事だいじにしてるんぢやありませんけど、これだけ長い手紙を血で書くのは大變たいへんだらうと思つて感心かんしんしてるんです。』と、芳子よしこはもう氣味きみわるさを感かんじなくなつて、其その手紙てがみをヂツと膝ひざの上に押おさへてゐた。膝ひざの温あたたか味が手紙てがみを透とほして、掌てのひらへ感かんじて來るのも、何なにとなしに懐なつかしみがあつた。

『お前まへ、其その手紙てがみは餘よほど念入ねんいりの不良少年ふりやうせうねんが書かいたんだよ。一筋縄ひとすぢなはでは行ゆかないと思おもつて、そんなことをしたんだらう。今言いまつたやうに紅べにに墨すみを混ませたか、事ことによると鶏にほせりの血ちか何かで書かいたんかも知しれない。額ひたひちの血ちだなんて、いゝ加減かげんのことを言いつたね、額ひたひちからそれだけ血ちを出だしたら大變たいへんだらう。』と母親ははは氣きづかはしさうに芳子よしこの顔かほと、膝ひざの上うへの手紙てがみとを見比みくらべるやうにしながら言いつた。芳子よしこは其その手紙てがみをちや

んと元の通とほりに折をつて、封筒ふうとうへ入れた。

### 三十六 皮肉な贈物

其その夜よ、芳子よしこは夢ゆめに松崎二郎まつざき じろうといふ青年せいねんを見た。瘦やせた神經質しんけいしつらしいところに、何處どこか氣高けだかい、天才てんさい的てきのところが見みえる男おとこで、年としは十九といふことだが、二十五六と思おもはるゝほど老よけてゐた。髪かみを長ながく伸ばして、上うへへ撫なであげた顔かほが、可かなりに長ながい面長おもながで、赤あかい唇くちびるを開あいてハキ〜と、物ものを言いふが、どちらかと言いへば、無口むくちの方ほうであつた。

其その場所ばしょは何かの會場かいちやうで、多おほくの人々ひとびとが集あつつてゐた。『あれが松崎二郎まつざき じろうといふ近頃ちかごろ珍めづらしいヴァイオリンの天才てんさいです。巧たくみに指ゆびを使つかふことにかけては、全まったくこれまでこれまでの日本にほんでは發見はつけんされなかつた人ひとです。』と、誰たれやらが誰たれやらに話はなしてゐるのを、



芳子は側で聞いてゐて、胸がわくわくした。誰れか識つてゐる人が来れば紹介して貰ふのにと思つて、四邊を見たが、知つた顔は一つもなかつた。其處へ先頃東華女學校のことで最初に自分を訪問して来た園部百合子が来て、相變らず白粉の濃い顔で、にこやかに挨拶をしたから、芳子は直ぐ「あなた、あの松崎さんと仰しやる方を知つてゐらつしやいますか。」と問うて見ると、百合子は黒い上衣に白いツポンを穿いた其の青年の後姿をちらりと見て、氣の故か少し顔を赧らめつ、「存じません」と膠もなく言つた。其處へまた聲樂家の星島光子がにっこり笑つて姿を現はした。芳子はこの人ならきつと知つてゐるであらうと思つて、少し恥かしい氣持ちになりながら、小聲で松崎のことを問ふと、「あなた大變なものゝことを訊くのね。松崎二郎つて、あれはあなた有名な色魔ぢやありませんか。」と、驚いた顔をして言つた。其の途端、黒い上衣に白いツポンの松崎二郎が怖い顔をして此方に向いたので、芳子はハツとして眼を覺ました。短い夏の夜はそろ／＼明けかゝつて、欄間の障子に

は白い光が映りかゝつてゐた。妹の磯子がゐないので、廣々蚊帳が殊に廣々としてゐた。芳子の脊中は冷汗に濡れてゐた。

母と唯二人の家は、朝起きても片付きが早かつた。芳子は一人机に凭れてポカンとしてゐると、玄關へ人の訪れる氣色がしたが、何んとなし懶いので、母親の出で呉れるのに任せて、片腕を突きつゝ、片手で机の抽斗を開けて、またあの血書の手紙を取り出さうとした時、母親の足音がしたので、何か悪いことでもしかけてゐたやうに、其の手を引つ込めて、抽斗を締めた。

「學校の方が三人で入らしたよ、あの磯野さんと仰しやる方とあと二人。」と、母親は胡散くさうに芳子の手元を見やりながら言つた。さうして「此處へお通し申さうね。」と言ひ棄て、また玄關へ急いだ。

房子を先頭に三人のお客は、どや／＼と入つて来て、懐かしさうに芳子を取り巻いて坐つた。言ふまでもなく、皆芳幸會の會員であつた。



「大變なことが新聞に出てね。」と、房子は無遠慮にさう言つた。

「それで三人揃つて詰問に來たんですか。」と、房子はにっこりした。

「詰問？そんな野暮なことしやしないわ。花村さんの人格を信じてますもの。誰れだつてあんなことを信じないし、またあんなことがあつたつて別にさう悪いこと、は思はないわ。思想と私行とは別ちやありませんかね。」と、房子は同情の眼を輝かしつゝ、ヂツと房子の顔を見詰めて言つた。

「さうね、だけど世の中つて、随分馬鹿々々しいのね。」と、房子は苦笑ひをした。

「今日はあなたに、贈物するものがあつて、お邪魔したの。」

「稍暫らくしてから、房子は傍の稍大きな風呂敷包みを引き寄せつゝ言つた。

「わたしに？……。」と、房子は怪訝な顔をして言つた。

「えゝ」と言ひく、房子が風呂敷を解いて取り出したのは、桐の箱に入つた、恭し氣なもので、蓋をとると、内部からは黄色い木綿に包んだものが出て來た。それは

白地に藍色で唐草模様を現はした花瓶であつたが、眞ん中から見事に毀れたのを金漆で接いで、『自由女學園創立記念』の九字が矢張り金色で書いてあつた。

「これなアに？」と房子は其の花瓶を見詰めたが、東華女學校に何か儀式のある毎に藤島校長の家から持つて來ては、其の折々の花を活けて、正面の卓子の上に載せるものと、全く同一の品であつた。

「見覚えがあるでせう、この花瓶！ わたしたちはこの花瓶を見る度に、頭の中が舊思想の蟲に食ひ破られて行くやうな氣がしたぢやありませんか。」と、房子に隨いて來た二人のうちの一人は言つた。

「あゝこれ、あの花瓶ですか。學校の？」と、房子は覺えず膝を押し進めた。

「あれぢやありませんよ。あれを模造したの。」と、房子は微笑みつゝ言つて、『花村さんはまだ御存じないでせう。東華女學校では七月の末に修養會とか言つて、突然全校の生徒を二階に集め、校長の演説やら來賓の演説やらがあつて、猛烈に舊思想



を鼓吹したんですつて、其の來賓が揮つてゐるわ。上瀧博士に片倉刀自ですつて、帝國主義の提灯持ちやら、八十幾つのお婆さんに女子教育を説かれちやたまらないわね。」と、房子は大きな聲で言つた。

「それで、この花瓶がどうしたといふのです。」と、芳子はだいぶ重い花瓶を手に取り上げて見ると、まだ出来たての磁器で窯の匂ひがするほどであつた。

「ところがね、どうしたのか、上瀧博士の演説中にあの校長愛蔵の花瓶が卓子——と言つてもあの麥酒箱を重ねて布片をかけたあれでせう——から落ちて、二つに破れたんですつて、見てゐた方は皆いよ——舊思想の破滅だと言つて笑つたさうですよ。それを今井さんのお父さんがお聞きになつて、早速其の花瓶の模造品を拵へさせ、自由女學園創立の記念品にして方々へ配るんですつて、なか——思ひ付きがうまいでせう。」と、房子は息をも吐かずと言つた。

「よくこんな早く出来ましたわね。それに随分うまく模造してあるぢやありませんか。

んか。わたしも何んとなくあの花瓶に反感を持つてゐたから、あの古渡り南京とかいふのをよく覚えてますが、スツカリその通りね。」と、芳子はまた其の花瓶を取り上げて、つく——と見ながら、

「その毀れたのを接いだやうに見せてあるところが、皮肉ね。」と言ひ足した。

「まだ——なか——出来ないのよ。見本に出来たのを、一番先に花村さんへ上げなければいけないと言つて、わたしたちが持つて来たんですの。……ちやんと満足に拵へてから二つに破つてまた接ぐんだから、なか——手数がかゝるの。普通なら兎てもこんな早く出来ないのを、今井さんのお父さんが、知つて居らつしやる工場で急がせたから漸と二つだけ出来たんです。」と、房子は早口で言つた。何にしても皮肉な贈物であつた。



## 三十七 カルウソオの夕

それから四五日すると、青木さんの阿母さんから、芳子と磁子とに晚餐の案内があつた。芳子は別にさう行きたいとは思はなかつたけれど、折角の好意を断ることも出来ないし、父母が頻りに早く行け、早く行けと勧めるので、海水浴から歸つたばかりで眞ッ黒な顔をしてゐる磁子を連れて、芳子は夕方から青木さんへ行つた。二階の廣間へ通されると、正面に立派なマホガニ材の蓄音機が据ゑてあつて、レコードアルバムが幾つも並んでゐた。

『ほんとによく入らして下さいました。』と言って青木さんの阿母さんは一郎さんと二人で出て来て、芳子姉妹に挨拶をした。『御馳走の出来る前に、いゝ音楽を聴かせますよ。』と言つて、一郎は直ぐに蓄音機へ取りかゝつた。ヴィクトロラの精巧な機械なので、其發する音楽は殆んど眞ん物に變らなかつた。

エルマンのヴァイオリン、シユーマンハインク夫人の獨唱など、芳子にも眞物を聞いたのが二つ三つ濟んでから、カルウソオやマツコルマツクなどのテノオルが、見事な響きを立てた。音楽の好きな芳子姉妹は、たゞ恍惚としてゐた。カルメンのジブシイの歌もあつた。ロミオとジユリエットもあつた。何んとかいふ婦人のソプラノはカルウソオのテノオルよりも、なほ高く響いて殊に芳子を感じさせた。『これいゝでせう。このレコードは僕のぢやないんです。松崎といふ音楽好きの友人から借りて來たんです。松崎は實にいゝものを持つてますよ。』と、一郎さんの言つた時、芳子の顔色はさつと變つた。

其の松崎さんと仰しやるのは、松崎二郎といふヴァイオリンのお上手な方ぢやありませんか。』と、芳子は少し聲を震はせつゝ、夢に見たことをも混ぜて、一郎さんに問うてみた。

『え、松崎二郎です。御存じですか。しかしヴァイオリストぢやありません。』と、一



郎さんは珍らしくフランス語で言つて、『畫家です、美術家です。』と言ひ足した。さうして十二吋盤のレコードを、黄色く染まつた指先きで取り外してゐた。一郎さんは近頃蓄音機のほかに、寫真にも凝り初めたので、まだ自分で現像もしないのに、薬品で爪を染めて、俺は寫真をやつてゐるぞと言はないばかりに、電車の中などで人々に見せびらかしてゐる。一面には沈着なところがあつて、他の一面にはまたかうした浮薄な、輕佻な氣質を帯びてゐるのが、芳子の一郎さんを好きになれぬ原因だと思はれた。

『少し息みませうかね。御飯が濟んでからまたやりませうよ。カルウソオがまだ五枚ありますから、それをね。』と言つて、一郎さんはカタリと蓄音機の蓋をしてから、カッターを取り出して、今使つた竹針の先きを一本々々尖らした。其の手付きの巧みなのに芳子は、覺えず見惚れてゐた。

『西洋音楽は、チンブンカンでわたしには解らないから、後で少し日本ものをやっ

て下さいよ、一郎さん。義太夫と長唄をね、それに哥澤も一枚くらゐいゝでせう。』と、阿母さんは言つた。

『野蠻人の音楽ですか。そんなものは階下にある蓄音機にかけたら丁度いゝでせう。これにかけると蓄音機が泣きますよ。』と、一郎さんは膠もなく言つた。

『だつて、わたしは日本人だもの、日本の音楽がいゝよ。』、阿母さんは笑つて、『あなたがたも矢張り、一郎と同じで西洋音楽がお好きなんでせう。』芳子と磁子との方を見た。二人ともにこゝして俯向いてゐた。

『しまつてゐるぢやありませんか。今時の若い者に、日本音楽なんぞ聴くものがあるもんですか。こなひだも松崎と二人で、三越のレコード會に行つたら、間へ日本ものを挟むんでせう、さうすると、聴いてるものが半分くらゐ立つてしまつて、残つてゐるのは、阿母さんみたいな年寄りばかりでしたよ。』と、一郎は蓄音機の箱の蓋を、カタ／＼と開けたり締めたりしながら言つた。『松崎』と言つたのが、芳子の



耳を刺すやうに響いた。

やがて、阿母さんが階下へおりて行くと、間もなく種々の料理が、女中と二人で運び込まれた。芳子もデツとしてゐるのはわるいと思つて、階下へ手傳ひに行かうとすると、阿母さんは階子段のところで遮り止めて、『あなたはお客さまですから、どうぞお座敷に居て下さい。今に家の人になつて下さつたら、厭やだと言つても、ドツサリ手傳はせますから。』とにこ／＼しながら言つた。

運ばれた料理は、皆阿母さんの手になつたもので、料理屋から取り寄せた品は一つもなかつた。其の料理がまた手際よく出来てゐて、芳子は女學校の割烹科で習つた知識を應用しつゝ、一箸毎に感心した。飲みものとしては、炭酸水とキエラソオとが出たのも、今宵の音楽にふさはしい好みであつた。開け放した縁側から涼しい風が吹き込んで、青簾の外には、お能の小督を書いた岐阜提灯が、ゆら／＼揺いでゐた。誰れも團扇を手にするものもない涼しい夜であつた。

食事が済むと、また蓄音機が始まつた。阿母さんの好みで呂昇の壺坂がかけられた。『夢が浮世か浮世が夢か……』といふ語り出しが、全く其の人の前で聴くのに變らなかつた。西洋音楽では、この蓄音機がこれほど肉聲に近い美しい音を發するものとは思はなかつたが、義太夫をかけて、始めてこの蓄音機の優秀なことを、芳子は十分に感じた。

『レコードがわるいから駄目ですよ。』と言つて、一郎は三枚ばかりで壺坂を止めてしまつた。裏表で十三枚あるさうで、壺坂をまるごかしにやると、丁度一時間半からかゝる、ほんものを聴くのも、レコードをかけ換へるだけ時間が餘計かゝるといふ話であつた。

『レコードをかけ換へるので、折角の義太夫が途中で切れて厭やですね。』と阿母さんは呂昇の美聲に聴き惚れた顔を、うつとりとさせて言つた。

『レコードを二枚並べてかける蓄音機の發明が出来ましたよ。一つやつてゐるうちに



他の一つをかけ換へておくと針が交る／＼レコードを渡つて行くんです。それでなくても、機械二つ並べて、巧く接続させればいゝんです。レコードが両面なら二通り備へる必要がありますがね。」と、一郎はゼンマイを巻きつゝ言つた。

「贅澤だね、それも。」と、母親は女中の持つて来た紅茶を一同に進めながら言つた。芳子姉妹のお土産の水蜜桃を出された。

「なんしろ、日本製のレコードは駄目です。音波がやつと百十二三ですものね。これなんか、……」と、一郎さんは緋色のマークの美しい舶來の十二吋盤一つ取り上げて、「音波が百三十です。近頃矢張りアメリカの、チェンニーといふので拵へたレコードは音波が百四十一で、肉聲と少しも變らないさうですが、まだ日本へはあまり來ません。」と、得意氣に説明した。

それから哥澤の宇治茶が一つ濟んで、またカルウソオになつた。曲はラ・ボエエムで、ロドルフォの物語に始つた。何んとかいふ女の歌ひ人のソプラノが挾まつて、

可憐なミイミイの姿が、カルウソオのロドルフォとゝもに、其處へ踊り出したやうに思はれた。曲が終つてからも、芳子は薄倅の詩人ロドルフォと薄命の美人ミイミイとのことを考へて、うつとりとなつた。

カルウソオの夜は、かうして更けて行つた。芳子は松崎といふ青年のことが、兎角氣になつて仕様がなかつた。

### 三十八 水曜日 水の女

九月の初めはまた暑かつた。上野の畫の展覽會が開かれて若い藝術を愛する人の足は自然に其處へ向いて行つた。芳子が唯一人で、山下に乗合自動車から下りて、公園の入口を、繁つた木立の下の大道へと辿つて行つたのは、まだ眞夏が舞ひ戻つたかと思はるゝ、暑い日の午後であつた。往來の人々は皆汗を拭いてゐた。後を振



りかへると、廣小路の方の雑沓の中に、氷屋の旗が一際勢ひよく風に翻つてゐた。芳子は今乗合自動車から下りて、大きな喬木の下まで歩いて来た後を振りかへるとともに、また自分のこの春以来の生活を振りかへつてみた。東華女学校の卒業式の騒ぎ以来随分あわたましい自分の生活であつたと思つた。あだ花ばかりが空しく咲いて、一向實にもならぬ自分の生活が恥かしかつた。何んとか考へなければならぬ。一人で静かなところへ行つて、本でも讀んでゐたいと思つた。この春帝國劇場で見たロシアの有名な藝術家S夫人の『瀕死の白鳥』の踊りが、不圖思ひ出された。さうしてあの踊りの持つてゐる豊かな藝術味と、S夫人の天才の閃きとが、自分をば、うつとりとさせるとともに、また眩しく感じさせた。いゝ藝術の前に立つた時ばかりが生き甲斐のある人間であると、また今更にしみる考へられた。あのS夫人の踊りを見て、あの立派な、自然に湧き起る様な管絃樂を聞いた外に、自分は此春以来何をして来たか。それを考へると、芳子は坐るに恥しくなつた。

漸くに展覽會の會場に入ると、海老茶の幕で風が遮られてゐるので暑さが一層強くなつて、蒸されてゐるやうであつた。第一室の静物から静かに見て行くと、暑さも頗に忘れられて、或風景畫に對した時などは、青い繪具に描かれた小川の畔から涼しい風が吹いて来るやうに思はれた。未來派の畫が二つ三つ並んでゐる前に立つて、芳子は暫らく、あれかこれかと思くらべてゐた。難かしい理窟は解らないが、詩のやうな美しい感情の流れたものだと思つて、其のうちの一つに見入つてゐた。かういふ畫が描けるものなら描いてみたいと思つた。女流作家の畫があつた。二つ宛別々に違つた室にあつた。人物畫と肖像畫とであつた。芳子はどれにも皆感心させられて、其の前を立ち去り兼ねた。他の畫を見ようとして、少し歩きかけてはまた女流作家の畫の前へ戻つて来た。さうして、人に示すべき何等の才能もない自分をば、しみと恥かしいと思つた。有名な大家たちの畫、この展覽會の中心になつてゐる人々の大作をばすうつと尊



敬の念をもつて見て廻り、西洋人の出品の前には、殊に人だかりがしてゐるのを、後の方から覗いて、第六室に差しかゝると、其中ほどのところにあつた都賀に近い田園を描いた十五號のが、眩しいやうな光りをもつて、芳子の眼に映つた。目録と引き合はして見ると『春』といふ題で、作者は松崎二郎とあつた。

芳子はハツとして、身體が立ち竦んでしまつた。さうして四邊をきよろくと見廻はした。

松崎二郎。……あの血で書いた手紙の人であらうか。それとも別の人であらうか。さう思つて、つくづくと畫に見入つたが、如何にも春らしい長閑な畫ながら、其の青い草の上に、或は遠く眺めらるゝ工場の壁の中に、煙突の下に、何等かの強い生命が躍り出さうとしてゐるやうで、畫全體が動き出しさうであつた。しかし芳子の感嘆はそれに止まらなかつた。其の次ぎの畫も同じ作者のものであることを知つて、隣りの矢張り十五號へ眼を移した途端、芳子は覺えず『あッ』と聲を立てた。

それは『水曜日の女』といふ題で若い女の半身像を現はしたものであつたが、鏡に映る自分の顔を見るやうに、自分によく似てゐて、自分の特徴が實によく現はれてゐるのに驚いたのであつた。あの血書の手紙によると、松崎といふ青年は、まだ自分を見たことがない、新聞雑誌に出る自分の寫真も成るだけ見ないやうにしてゐると書いてあつた。それなのに、どうもかうよく自分の特徴を描したのは、實に不思議である。あの手紙が嘘なのか、それとも松崎二郎といふ畫家が別にあるのか。一郎さんの話の松崎二郎といふのも畫家で音楽が好きだといふことであつた。さうさう松崎二郎といふのが幾人もあつて其が皆似よりの人間だといふのも變である。しかし、あの血書の手紙では、小學校へさへ碌に通はなかつた今年十九の無教育な青年といふことであつた。小學校にさへ入らぬといふからは、貧しい家にさまつてゐる。其の貧しい家の子が、西洋音楽のいゝレコードを持つてゐるのも不思議である。これは矢張り自分のところへ血書の手紙をよこした松崎二郎とは同名異人で



あらう。一郎さんの話した松崎二郎がこの畫を描いた人で血書の手紙の松崎は全く別であらう。

芳子はかう考へて、松崎二郎といふ若い畫家が寫眞をモデルにして、自分のこの顔を描き上げたものであらうかと思つた。それにしても、『水曜日の女』といふこの題の意味が解らない。『水曜日、水曜日、水曜日、……』と、芳子は幾度も口の裡で繰り返しつゝ、いろ／＼と考へてみたが、どうも水曜日といふ心當りは附かなかつた。さうするとこれは自分によく似た人をモデルにしたので、自分とは全く係り合ひのないものかも知れないと、芳子はまた考へなほした。けれども何んだか氣にかゝつて、其の畫の前を立ち去り兼ねた。

ところへ、この展覽會の會員だと思はるゝ人が、洋服姿で羽織袴のでつぶり肥つた紳士を案内して來て、『どうです、この水曜日の女は、今年はこれが△△賞になるだらうと思ひます。まだ十八九の若い男で、小學校へも入つたことがないといふの

ですが、天才でせうね。』と、熱心に説明した。

『さうですか、それはえらいものですね。』と、肥つた紳士は感心した風に首を傾けて、水曜日の女に見入つてゐたが、『こつちの春といふのも、同じ人ですね、これはどうです。』と、どうやら『春』の方が氣に入つたらしかつた。

『それもわるくはありませんが、兎に角この水曜日の女は傑作ですよ。御存じでせう、この春東華女學校の卒業式に總代として答辭を述べる機會を利用して、舊式の女子教育を攻撃した女學生があつたでせう、花村芳子と言つて。』と、中年の美術家は直ぐ側に本人の立つてゐることも知らずに、大きな聲でやり出した。

『え、知つてます。あの轉婆でせう、新聞によく寫眞が出たちやありませんか。近頃また何か始めとるさうですね。演說會をやつたりなんかして。……あの女とこの畫家と何か關係でもあるといふんですか。』と、肥つた紳士は婦人の新らしい運動などに就いては、總べて惡感情をもつてゐるやうな風で言つた。バナマ帽子をとつ



て、額の汗を拭いた時に、よく見ると、頭がツルリと、見事に禿げた老人であつた。

『いや関係があるといふのでもないんですが、其の花村芳子といふ新時代の女性をモデルにしたのがこの水曜日の女なんです。一度も花村といふ女に會つたこともなし、寫眞さへよくは見たことがないんださうですが、なかくよく似てると花村を知つてゐる人は言ひますよ。何んでもこの松崎は非常に花村の思想に共鳴して、思想から人間の容貌を割り出してこの畫を描いたんださうです。花村に似てる似てゐないは別として、これだけ情熱の躍動した畫は、一寸見られません。それに色の單純化が珍らしく、効果を上げてゐます。この一作ではまだよく分りませんが、將來はこの會の寶ともなるべき青年作家だと思ひますね。』と、美術家はいよく熱心に説き立てた。

らね。時代おくれの老人だと嗤はれても仕様がなない。實際さうなんだから。』と肥つた紳士は福々しく膨れた頬に笑ひを浮べつゝ言つた。さうして、『兎に角新しい女と、古澤庵とは蟲が好きませんよ。花村芳子なんて大嫌ひだ。』と言ひ足して、畫面に唾液でも吐きかけさうにした。

芳子は直ぐ側で自分のことをいろ／＼に批評されるので、顔を赤くしたり、腹立たしく感じたりしながらも、其處を立ち去ることが出来なかつた。『水曜日の女』に言ひ知れぬ力が籠つてゐて、動もすると畫の方へ引き付けられるのであつた。

『水曜日の女……』とは、どういふ意味だらう。詞になつてゐないやうな氣がするが。』と肥つた紳士は、もう一度其の畫を見なほしながら言つた。

『さうですかね。』と、美術家はもう肥つた紳士を相手にしないやうな態度をとつた。さうして、一人でずん／＼と事務室の方へ行つてしまつた。



## 三十九 門前の追懐

芳子は随分長く展覽會の會場に居た。觀覽人は入りかはり立ちかはり、順々に違つた顔になつたが、唯一つ『水曜日の女』の畫の前を離れない女の顔があつた。それは芳子の顔であつた。

目明き千人、盲目千人といふ古い言葉が思ひ出された。可なりいゝ批評を下して行く人もあつたが、また随分解らない悪口を言つて行く人もあつた。芳子は先刻美術家が言つた批評を辿つて、深く『水曜日の女』を研究してみた。さうして燃えるやうな情熱と眞摯な色とが、見れば見るほど、人を感動させるものがあるのを覺えて、いよゝゝこの畫と其の作者とを尊敬する氣になつた。

展覽會の會場を出たのは、もう閉場に近い頃で、上野の森の梢に、黄昏を告げる鴉が、そろ／＼と啼き出さうとする時分であつた。しかしまだ太陽は西の空に輝

いて、木立の隙間から、如何にも秋らしい、寂し氣な光りを投げかけてゐた。

芳子は『水曜日の女』の作者の面影を、いろ／＼に想像しながら、上野の山奥の方へ足を運んでゐた。何處へ行かうといふ當てもないのだが、中山先生のお宅を訪ねた頃によく通つた道を其のまゝ歩いてゐた。女中の澤を連れて、この道を始め中山先生の許へお伺ひしたのは、花の盛りの頃であつたと想ふと、遣る瀬ない思ひが、さゆうと腹を引き締めるやうであつた。四五六七八と指折り數へて、僅か五ヶ月の間に、いろ／＼のことがあつた。生れてから十八年の間よりもこの五ヶ月の間の方が多事であつた、十八年からこの五ヶ月を引いてしまへば、自分の生活には全く何物もない、ぼんやりした夢のやうなものであると、芳子は考へてゐた。

あの時は花盛りであつた幹の太い櫻の木に葉が濃く繁つてわたしにも春はあつたのだよ、とでも言ひたげな姿をしてゐた。やがて秋風がおとづれると、この葉が黄色に染まつて、バラ／＼と落ち散るであらう。さうして枯木のやうになつた哀れな



枝に霜がおいたり、雪が積つたりして、漸くにまた新しい春を迎へ、美しい花を咲かせるのであるが、人間の身體には一度秋が来ればもう春は決して廻つて来ない。若い時は二度となくて、紅顔は白骨へとじり／＼進んで行くのである。

芳子はそんなことを考へて、痛ましく寂しい想ひに、涙を催しながら、いつの間にか公園を通り抜けて、思出の深い中山先生の舊宅の前に立つてゐた。門の標札が變つたゞけで、家の體裁は元の通りであつた。初めて来た時は、この前に自動車が停まつてゐた。あの折りは家の内が賑やかで、來客が多かつたが、今は全く空家のやうに、しいんと静まりかへつてゐる。芳子は亡き中山先生のことが次ぎから次ぎへと偲ばれて、涙の頬を傳ふのを覺えなかつた。この家をば買ひ取つて、琴子が大きくなつてから住まはせたら、先生の靈も嘸喜ばれることであらう、なぞとも考へた。中山先生が、せめてもう十年生きて居られたら、この家も日本の大女流作家の舊宅として、永久に保存する價值が生じたかも知れない。先生は自分の作物を集め

て残らず焼き棄てたいとまで遺言して亡くなられたけれど、豫約で出版する其の全集の第一巻はこの月初めに發賣の廣告が見えて、新聞の文藝欄は非常の好況だといふことを傳へた。先生も一つの天才であつたに違ひない、もう少し生かしておきたかつたと芳子は溢るゝ涙を拭き／＼考へた。

何處からか、ヴァイオリンの響きが、初秋の夕風に傳つて來た。晝間から點けツ放しの門燈は、漸くに光りを現はして薄く黒く四邊の植ゑ込みを照らした。耳を澄ますと、ヴァイオリンの響きは、中山先生の舊宅の階下座敷から來るやうであつた。スウヴニールド・モスコウらしい。先頃一郎さんの家で聞いたエルマンのレコードとは比べ物にならぬが、しかし下手ではなさうだ。偕は音楽家の住居になつたか、小説家の後に音楽家はふさはしいと感心して、芳子は門の標札を薄暗がりの中に探り見たが、どうも聞いたことのない名の人であつた。

寂しい町にも時々人通りがあつて、怪訝な風で芳子を見て行つた、同じの人の往



きと復りとに二度眼を注がれて、まだ居るのか、何をしてゐるのであらうといふやうな顔をされたのには、芳子も厭やな思ひをして残り惜しく、懐かし 中山先生の舊宅の前を立ち去つた。

急ぎ足に元來た道を戻つて、東照宮の脇から不忍池の畔へ出ると、蓮の葉がところ／＼に島の如く水に浮んでゐた。もう花はないのか、まだ咲き残つてゐるのか、夜目にはよく分らなかつた。この池一面に蓮の花が咲き揃つたことを芳子は知つてゐる。まだ女學校へ入りたての、朝寝坊のしたい日曜日の曉を父に起されて、此處まで蓮の花を見に来たことがあつた。暗いうちに來て、蓮の苔が花になる時、ぼんと聞く音を聞くのだと、父は宵に言つてゐたが、それには兎ても間に合はないで父子が池の畔に立つた時は、蓮の葉に轉がる玉のやうな朝露に、朝日の光が映つて、キラ／＼と光つてゐた。ほんたうにダイヤモンドの玉のやうな美しい輝きであつた。花も紅いのと白いのが、相競ふといふ風で咲いてゐた。

それがもう今、所々に一塊まりづゝ、蓮の葉が見える位で、山下の活動寫眞のイルミネーションや、其の他の家々の裝飾電燈が逆まに池の水へ映つてゐた。しかしよく見てゐると、池は矢張り池らしく水の多い方がよいと思はれた。この池に舟でも浮べて、自由自在に漕ぎ廻はるやうにしたら、どんなにいいかなどとも思はれた。芳子は何んだか、まだ家へ歸るのが厭やであつたから、辨天の祠の門を入つて、裏へすうつと通り抜けると、長い觀月橋が眼の前にあつた。陰曆五日頃の月が西の森に沈みかけてゐた。直に太陽の後を追うて、夜の幌に包まれて行く新月の姿がいぢらしいやうであつた。

#### 四十 橋の上の黒い影

長い橋の上には人が居なかつた。芳子は靜かに堅いコンクリートを踏んで、橋を



渡つて行つた。橋の中ほどまで来た時、背後に足音がするので、振りかへつて見ると、黒い影が唯一つ動いて、此方が立ち止まると、先方も立ち止まつた。此方が歩き出すと、先方も歩き出す。芳子は氣味がわるくなつて、急ぎ足に橋を渡り切らうとすると、黒い影がバタ／＼と追ひ迫つて、

「あのう、失禮ですが……」と聲をかけた。四邊には他に人影が見えなかつた。

芳子はぎよつとしたが、弱みを見せてはならないと思つて、屹と容を正しつゝ、振りかへつて、立ち止まつた。しかし物は言はなかつた。

「失敬ですが、……」こまた同じことを言つたのは、頭髮の長い書生風の男で、言葉に鹿兒島の訛りがあつた。薄羽織がベラ／＼と風に翻つてゐた。

「わたしですか」と、芳子はまた屹となつた。

「え、失敬ですが、あなたは花村芳子さんぢやないんですか。」と、言ひく、其の青年は無作法にも芳子の顔を覗き込むやうにした。芳子はいよく嚴肅な態度に

なつて、心に武装しながら身構へをした。

「花村ですが、何か御用ですか。」

芳子の聲は、鋭い刃物のやうであつた。

「僕はかういふものですが、あなたに一寸お頼みしたいことがあるんです。こんなところで失禮ですが。」と言ひながら、其の青年の差し出した名刺を、芳子は受け取りもしないで、新月の殘光に透かして見ると、「角井廣之」と讀まれた。角井廣之、其は先刻芳子を見た△△會展覽會に立體派の畫を出品してゐたあの作家であつた。芳子は漸く、ほつと安心して、「何か御用でございませうか。」と、少し言葉を柔げた。しかしまだ／＼警戒は解かなかつた。

「ほんとに失敬ですが、僕の友人の松崎二郎といふ奴が」と言ひかけて、流石に無遠慮らしい素朴な南國の青年も、少し口籠つた。芳子は松崎二郎と聞いて、さつと赤くなつたが、夕闇は彼女の顔を包んで、青年の眼にはそれが映らなかつた。



『松崎があなたに戀をしちよるんです。』と、青年は随分露骨なことを言つて、『僕は友人として、松崎が戀に寔れて行きよるのを、見るに忍びないんです。』と、青年は熱誠を籠めて言つた。

芳子はだん／＼と柔かい心持ちになつて、涙くましいやうな感じさへして來た。

『松崎は何も言はないんです。僕等友人が幾ら問うても言はないんです。しかし僕等は松崎の藝術と其の日常生活から想像して、松崎の戀の對照をあなたとときめたのです。花村さん、松崎は天才です。確かに後世に残るべき大作をやる男です。この天才を、高が一婦人……』と言ひかけて、青年はハツと氣が付いたやうに、『……まだ見ぬ婦人に對する戀に悶死させることは出來ないんです。』と、青年の言葉にはいよ／＼熱情が籠つて來た。

芳子は何んだか催眠術にかゝつたやうになつて、角井といふ青年の言ふことを聞かされてゐた。

『しかし、僕等は何もあなたに松崎の戀をかなへてやつて下さいといふんぢやないんです。そんなことを言ふ權利は無いですが、たゞ一度あなた松崎と逢つてやつて下さいとお頼みするんです。松崎は立派な作品を出して、藝術家として世の中に現はれるまでは、あなたの寫眞も見ないと言つてゐるんですが、今度△△會に出した『水曜日の女』は、松崎を日本現在の藝術壇の最高位に立たせるだけの價値は十分だと我々の間には一致した定評があるんです。今年の△△賞が松崎の手に落ちるのは確かです。花村さんどうぞ一目でいゝから、松崎に逢てやつて下さい。』と、角井は嘆願するやうに言つた。

#### 四十一 藤棚の下で

芳子はもう何も言ふことが出來なかつた。松崎の傑れた藝術の力に引き寄せられ



るやうにして、長い觀月橋をもとへ渡つた。新月は西の丘に沈み切つて、空には星が降るやうであつた。初秋と言つても、まだ眞夏の餘炎が土から冷め切つてゐなかつた。白いものを着て、團扇片手に池の畔をそゞろ歩さする人たちもあつた。

芳子は角井に導かれて、精養軒の裏手から、狭い急な石段を上つた。上には電燈が花のやうに垂れさがつて、藤棚の縁が美しく、圓い食卓の並んだ庭園を覆うてゐた。大瀧が其の傍に落ちて、涼しさが四邊に充ちてゐた。其處の圓い食卓の一つに凭りかゝつて、舐めるやうにしながら、葡萄酒のコップを持つてゐた伸び放題に伸ばした頭髪を逆立てゝゐた半病人のやうな青年は、角井の姿と芳子の姿とを同時に發見してひどく驚いたやうな顔をした。

「君、連れて來たよ。」と、角井は早口に言つて、「これが松崎二郎君、これが花村芳子さん。」と矢つぎ早やに紹介した。松崎はもう逃げも隠れも出來ないといふ風で、垢に汚れた顔を赧く染めて、目禮すると其のまゝ差し俯向いてしまつた。芳子も顔

を眞赤にして、身體を堅くしながら立つてゐた。

「おかけなさい。」と言つて、角井は如才なく芳子に椅子を進めた。

「君。随分僕は苦心したよ。先刻會場で見かけてからずうツと尾行してたんだものね。君に此處へ來てると言つて、別れてから二時間の餘になるせ。」と、角井は笑ひながら言つた。芳子は漸く椅子に腰をおろして、松崎の様子を偷み見ると、全く蓬髮垢面といふ風で、洗ひざらしたらしい浴衣を着てゐた。しかし其の眼には、天才の閃めきとも言ふべき鋭い光があつて、青木の一郎さんなどはまるで違つた奥深さうなところがあつた。

女給仕の手で二三種の軽い食物が三人前宛運ばれて來た。それをば食べながら、角井は一人で喋舌つてゐた。

「どうも、君の畫の前へあんなに長く立つてるから、僕は花村さんに違ひないと直覺したね。後姿だけしか見なかつたんだけど。」と、角井は獨りで頷いた。



「しかし、君が見ないで、あれだけよく花村さんの顔や姿を描いたのは、實に奇蹟だね。石の手水鉢へ晝を描いて、それが裏へ抜けた以上の奇蹟だ。君と花村さんとは靈の交通があつたんだらう。肉眼で相見る前に、心眼で見交はしたといふやうなことかも知れないね。」とも、角井は言つて嬉しさうに、且つ満足氣な色を浮べた。芳子は餘り黙つてゐるのもわるいと考へて、何か少し言つてみようと思つたが、どうもいゝ言葉がなかつた。それで仕方なしに、「青木一郎といふ方を御存じでございませうか。」と、小さい聲で、松崎に問うてみた。

「え、知つてます。」と、松崎の答へは簡單であつた。

「あゝ、あの大学生の青木か。あれは近頃蓄音機と寫眞に夢中だね。可愛い坊つちやんさ。」と、角井は横から口を出した。

「あの方に蓄音機のレコードをお貸しになりましたんですか。」と、芳子はまた松崎に問ひかけた。

「いゝえ、あれは僕のぢやないんです。僕には音楽が解りません。」と、松崎はまだブキキラ棒に言つた。

芳子は夢に見た松崎二郎といふ青年が、ヴァキオリニストであつたことを思ひ出しつゝ、「僕には音楽が解りません。」と言つた其言葉が妙に耳へ滲みるのを感じた。

其の夜、角井の主唱で、芳子と松崎と角井との三人は有樂座の音樂會へ行くことになつた。時刻がだいぶおくれて、曲目は半分以上も終つてゐた。三人が入つた時は、星島光子が壇上に立つて、其のソプラノが始まらうとする時であつた。

## 四十二 夢と現と

星島光子の獨唱を、しみじみと聴くのは、芳子に取つて殆んど今宵が初めであつ



た。東華高等女學校の外、觀にも内容にも、徹の生を擴がつた中へ、一服の藝術味を齎したのは、星島光子が音樂の教諭として入つて來てからのことで、芳子たちは光子によつて眼を覺まされたやうなものであつた。頭の吉い藤島校長等は、そんな恐ろしいことにならうとは、夢にだに思はないで、音樂が女學校の必須科目になつたといふことに餘儀なくされて、物質上の報酬などを望まずに、快く就任を承諾した光子をば、學校の經費をさう増額させないで、教諭に迎へ得たことを喜んだのであつた。それまでは古いオルガンが一臺あつたきりの東華女學校にも、前年の卒業生の寄附でピアノが据ゑ付けられるし、世帯じみた、出汁がらのやうな女教師たちに混つて、光子のハイカラな優姿は、沙漠の中に咲いた一輪の花のやうなものであつた。それをば他の女教師たちが目引き袖引きして、蔭口を言つても、光子は一切平氣なもので、少しも頓着しないばかりか、何を蛆蟲めら、とでも言つて見下してゐる風に見えた。それがまた一層女生徒たちの人氣を集める種になつて、同情か

ら崇拜へと、七百人の女生徒は一齊に星島先生を謳歌した。そんな有様であつたのに、星島先生崇拜組の第一人たる芳子が、今までまだしみとくと、光子の獨唱を聴かなかつたのは、光子が決して學校ではほん氣に歌はなかつたのにもよるが、不思議と言へば不思議である。

こんなことを考へつゝ、芳子は有樂座の壇上に立つてゐる光子の姿を見上げて、其のソプラノに耳を澄ましてゐた。歌はあり觸れたものゝ日本譯であつたが、多くの人々の知つてゐる歌だけに、親しみも深く感動を與へることも多いやうであつた。芳子は東華女學校の女教師たちが揃つて新任教諭の光子に意地わるをした中でも、殊に家事の教師でオルガンの弾ける今西美子といふ名だけ美しい校内切つての醜婦が、光子の來るまで音樂教師の眞似事をしてゐたのに、光子が來てから音樂の方を全く光子に奪はれてしまつた口惜しさから、事毎に楯を突いては、光子に撥ねかへされ、纏に儀式の時自分が君ヶ代を弾くのと（卒業式の折りには光子がピアノを弾



いた) 光子よりも上席に坐るの事を追てもの慰めにしてゐたことなどを思ひ出し、先任順或は俸給順で、いつも末席に着いてゐた光子をば生徒が皆氣の毒に思つたことをも追懐して、妙に學校時代が慕はしくなつた。

光子の獨唱が終ると、芳子はうつとりとした心持ちで、色々學校時代の事を考へ乍ら、廊下へ出てみた。厭やな學校の事でも、自分の上に二度と還つて來ない女學生々活は矢張り懐かしかつた。初めて星島先生の美しい姿を迎へた頃の氣持ちが、俄に蘇つて來て、光子の姿がいつ迄も眼の前にちらついた。其の時分に比べて、光子は少しも變つてゐないが、自分は随分變つたであらうと思ふと悲しかつた。

角井も廊下へ出て來て、芳子の側に立ちながら、知つた顔と挨拶を交はしてゐたが、松崎は其のまま座席に残つて、プログラムばかり見てゐた。芳子は廊下と觀覽席との間のところに立つて、角井と松崎との様子にばかり注意してゐた。

其處へ樂屋からくるりと廻つて來た光子が、婦人記者の園部百合子の白粉の濃い

顔を伴つてやつて來た。芳子はそれを見る、と先頃松崎から血書の手紙を貰つた時の夜の夢に、まだ逢つたことのない松崎の姿を見て、丁度今のやうに其處へ光子と百合子とが連れ立つてやつて來た夢の中の光景を思ひ浮べた。夢では松崎が洋服を着てゐて、黒い上衣に白いズボンであつた。不思議なことには、眼の光りの鋭いこと、瘦せて神経質らしいこと、は、夢も現も同じであるが、夢ではもつとハイカラな青年であつた。さうして場所もこの有樂座のやうな或る會場であつて多くの人たちがこんな風を集つてゐた。松崎のことを百合子に訊くと、顔を根くして「知りません」と言つたから、更に光子に問うてみると、「あれはあなた大變な色魔ぢやありませんか」と言つた。それが夢の光景であつた。

芳子は今こゝに夢が現となつたいぶかしさを考へて、これも矢張り夢ではないかと疑はれた。試みに腿のところを抓つてみると痛かつた。

「松崎二郎さん、御存じですか。」と、芳子はさまりのわるいのをこらへて、先づ百



合子に問うてみた。

「え、知つて居ります。大層な評判でございませうことね、あの方の書は。」と、百合子は言下に答へた。

「あなたも御存じなの、松崎さんを。全く天才だといふ話ぢやありませんか、わたしには分らないけど。」と、光子も横の方から口を出した。夢の中では、大變な色魔ぢやありませんか、と言つたのにくらべて、現の世界では天才といふことになつた。何にしても松崎の評判の好いのを、芳子は嬉しく思つた。

其の夜は、到頭芳子、松崎、角井、光子、百合子といふ一團になつて、日比谷公園から丸の内の方を歩き廻つた。松崎は餘り物を言はないで、一同の後からあくれ勝ちに歩いてゐた。四人が揃つて北へ行く電車に乗るのを、唯一人南へ行く芳子がヂツと立つて見送つてゐる姿は寂しさうであつた。

『左様なら。』

『左様なら。』

電車の上と下とで、さう呼び交はす聲が、ハッキリ聞えるほど、電車は空いてゐた。窓から松崎の顔が此方を見てゐて、いつまでも消えなかつた。芳子は追つかけて行つて其の電車に飛び乗りたいやうな氣がした。

寂しくて苦しい胸を抱いて、とぼくと家へ歸つて來ると、門が堅く閉つてゐた。其の横町では一軒も起きてゐる家がなく、ほとほとと門の戸を敲く音が、一丁四方ぐらゐに響きさうに思はれた。阿母さんが自分で起きて門を開けてくれたが、「お歸りかい、大層おそいぢやないか。今頃まで青木さんにお邪魔をしてたの。」と言つた其の聲は、胸に釘でも打たれるほど辛かつた。

床の中へ入つてから、芳子はさめくと、枕を濡らして泣いた。一つ蚊帳の隣りの床に眠つてゐる妹磯子の顔が、無邪氣に苦勞を知らぬ風なのをつくつく見入つて、自分も初めて女學校へ入つた頃の時代がまた懐かしくなつた。ボンボン時計が



十二時を報じた。

### 四十三 半ば失戀

松崎二郎の評判が高くなるばかりで、毎日の新聞に其の噂の出ない日はないほどであつた。「水曜日の女」の畫が、作者の寫真とともに出ると、まるで芳子と松崎とが並んでゐるやうに、芳子の眼には見えて、ぞく／＼と嬉しかつた。

いよ／＼其の美術會から名譽の△△賞が松崎の手に落ちたといふことを報じた新聞には、また一齊に「水曜日の女」と、作者の肖像とが出た。其の日、青木の一郎さんが遊びに来て、頻りに松崎の噂をするのを、芳子はどんなに苦しく聞いたか知れなかつた。

「紹介しませうね、全くあの男は天才ですよ。」などと、一郎さんは天才を友人にも

つたのを誇るやうに言つた。今更「わたしも松崎さんを知つて居ります」とも言ひ兼ねて、芳子は殆んど當惑した。

父母はもう一郎さんをば芳子の許嫁のやうに思つてしまつて、芳子が決して結婚を承諾してゐないのを、さう重くは見てゐなかつた。なアにあゝして自由に交際さへさしておけば、今にさつと結婚するやうになるであらうと、芳子の父母も、一郎の母も皆さう思つてゐるらしかつた。別に急ぐことはない、一郎が學校を出て、法學士になつて、職業に就いてから、ゆつくり結婚させればよいと、双方で親たちが勝手にきめてゐるのであつた。

しかし、一郎さんは流石に、芳子が自分に心を寄せてゐないのを知つてゐて、半ば失戀の惱みを抱きながら、なほ半ば望みを繋いで、どうすれば芳子の心が自分の方に向いて來るか、そればかりに胸を痛めてゐるらしいのが、芳子にはいぢらしくもあつた。



「僕は、芳子さんのやうに天分がないんですから。」などと、悲しさうにして、一郎さんは言つた。

「あら、わたし、そんな天分なんかありませんよ。わたしは詰まらない、平凡な女です。東華女學校の卒業式の時の茶番が評判になつて、今ちや全く困つてしまひましたわ。」と、芳子は此頃少しづつ、窶れの見える一郎さんの顔を覗くやうにしながら言つた。亡き中山女史の家で初めて會つた時は、くるくると圓い頬をした元氣な青年であつたのに、今は妙に老成じみて、舉動にも言葉にも力がない。

「いやあなたには確かに天分があります。今に屹とあの松崎みたいに、一代の流行兒になることがありますよ。」と、一郎さんは斷定するやうに言つた。

一郎さんが芳子を訪ねて来て、ゆつくり遊んでゐたのは、この日が初めてであつた。父は經營してゐる印刷所の方へ行つて留守であつたが、母は非常に喜んで、出来るだけの歡待をした。さまじい果物や菓子も芳子の室に並べられて、座敷の方で晩

餐を出すことに用意が出来てゐた。もう歸るといふ一郎さんを、母が引き留めて、女中を對手に臺所で手料理の支度を急いでゐた。

芳子は一郎さんと二人で差し向ひにゐるのが厭やであつたから、妹の磯子と呼んで、三人になると、母親が何かと用事を拵へては、磯子を呼び出してしまつた。

「僕ね、法科を卒業したら、文科を三年やらうと思ふんですよ。」と、一郎さんは、力めて芳子の氣に入りさうなことを言つた。

「さうでございますか。」と、芳子は冷淡に答へた。

「劇文學を専門にやつて、行々は小さい劇場を一つ建てるんです。そして模範的の芝居を演らしてみたいと思つてゐます。」と、一郎さんは面を輝かしつゝ、熱心に言つた。

芳子は一郎さんの前途を祝福したいと思ひながら、どうかして、自分のことを忘れてくれるやうにしたい、失戀の惱みに苦しませたくない、頻りにそればかりを



考へた。

父が歸つて来て、一郎さんをお客に自分の家としては、珍らしいほど、御馳走のある晚餐が始まつたが、芳子は少しも楽しいと思はなかつた。父母が頻りと一郎さんの機嫌を取らうとするのを、芳子は苦々しい氣持ちで眺めてゐた。

「うちにはどうも、娯樂の道具がないので、いけないなア。」などと、父は食後の果物を剥きながら言つた。

#### 四十四 三人に四枚の切符

其の月の末には、ロシアの歌劇團が来て、帝國劇場に出演することになつた。行きたいと思つてゐるところへ、星島光子が誘つてくれたので、出かけることにして支度をしてゐると、青木の一郎さんが門前から聲をかけて、同じところへ誘ひに寄

三人に四枚の切符

つたといふことを、大きな聲で母親に言つてゐた。

「まあ、あなたどうぞお上り下さいませよ。」と、母親は襷を外して、大騒ぎをした。女中と、ともに臺所で光子へ出す夕飯の用意をしかけてゐたので、急にまた一人前殖やすことになつて、女中を魚屋へ走らしたりした。

「い、え、僕表で待つてますよ。」と言つて、一郎は門を入つたきり、格子戸を開けなかつた。

「まだあなたお早やいちやございませんか、七時半からださうでございますから、今からちやあなた、二時間もありますよ。」と、母親が玄關で言つてゐるのが、光子の室へまで筒抜けに聞えた。

「お客さま。」と、光子は少し工合わるさうにして耳を欹てた。

「え、なにいゝんでございますよ、内わの方ですから。」と、芳子は言つたが、この内わの方といふ言葉を使ふのが、如何にも心苦しかった。

三人に四枚の切符



「されぢや此處へお通し、たらい、でせう。わたし少しも構ひませんから。」と、光子は自分の座を片隅へ寄せて、新來の客の爲めに廣く疊をあけた。

今日はいつもの學生姿でなくて、仕立ておろしの薄色の背廣に、麥稈帽子も上等のを被つて、スツカリ年少紳士になり済ました一郎は、細身の洋杖で敷石の上をこつくと叩いてゐて、容易に玄關へ入つて來なかつたが、母親に強ひられて、芳子が迎ひに出たので、不承々々といふ風を見せながら、其の實はいそくと、靴を脱いで上り込んで來た。其のスツキリとしたハイカラ姿はますます母親の心を動かし、たやうであつたが、芳子は却つて、洗ひ晒らしの浴衣で芳子に逢ふのを恥ともしなかつた松崎二郎の人格に敬服してゐて、一郎さんが自分の歡心を買はうとすればするほど、いよ／＼松崎を思ふ情熱の炎が燃えて來た。あの血書の手紙をば毎日一度づゝは、父母に隠して、懐かしく披き見ない日とてはなかつた。

芳子の居室へ通された一郎は、光子と顔を見合はせて、「おや、あなたでしたか。」

と互ひに同じことを言つた。

「いやね、花村さん、青木さんぢやありませんか。内わの方だなんて、思はせ振りなさるのよ。」と、光子は戯れて言つた。この二人は中山先生のお宅で落ち合つて、ずつと前から知り合ひであるのを、芳子はうつかり忘れてゐたのであつた。

「え、内わの方ですよ。」と、一郎も戯れて、てれ隠しに其處にあつた△△展覽會のカタログを披くと、松崎二郎の『水曜日の水曜日の女』が現はれた。

「全く松崎はうまい、天才だね。それにこの『水曜日の女』の顔が、芳子さんに似てゐるから不思議だ。ね、似てるでせう星島さん。」と、少しも其の畫の出來た由來を知らぬ一郎は寧ろ得意氣になつて、カタログを光子の鼻ツ先さへ出した。

芳子は自分の不用意から、一郎を内わの方だなどと光子に言つたのを悔いつゝ、差し俯向いて考へ込んだ。

母親の手料理の夕飯を済ませると、丁度時刻がよくなつたので、三人連れ立つて



外へ出た。初秋の空はよく澄んで、燈火の眇い横町もまだ明るい宵であつた。表の通りまで出ると、其處に自動車が一臺停まつてゐた。運転手が一郎にお辭儀するまで、芳子も光子も、それが自分たちの乗用になるものとは思はなかつた。二女は相顧みて苦笑した。

「青木さん、スツカリ紳士になつちやつたのね。」と、光子は冷かすやうに言つた。

「折角の自動車も、貧乏人の家へは、路が狭くて、門の前まで入れないからお氣の毒ね。」と、芳子も嘲笑を浮べて言つた。

「いゝえ、僕の家だつて、矢ッ張り門の前まで來ないんですよ。」と、一郎は辯解するやうに言つた。

光子と芳子とを正面に並べて、一郎が其の向ふ側に相對して乗つた自動車は、直ぐ劇場の車寄せに着いたが、光子にも一郎にも一等の切符が二枚あつて、芳子は光子の方へ行かうか、一郎の方へ行かうかと、一寸迷つた。光子の方へ行きたいのは

言ふまでもないが、一郎を排斥するやうなことをするのも、忍び難いことであつた。「勿體ないわね、切符を一枚無駄にしちまつちや、賣り切れてるんですから、望み人は幾らもあつてよ。」と、光子は案内女を顧みて言つた。さうして芳子と一郎の方を見やりながら、「お二人で見えてゐらつしやい。」と、戯れるやうに言つて、さつさと一階の座席の方へ入つて行つた。芳子は心の進まぬながらに、一郎と並んで二階の席で見ることになつた。

今宵はリゴレットで、間もなく幕の開いた舞臺には、モントラウア公爵の宮殿の一室が、だいぶ貧弱な大道具で飾られてあつた。出て來る人物の衣裳も美しくはあるが、立派だとは言ひ兼ねた。其の中で主人公公爵の體格の見事なものと、背中を屈めたリゴレットの、黒と赤と染め分けの着物が目に立つたくらゐるものであつた。しかし公爵の歌ふバラータを始め、歌は皆流石にいゝと芳子は感心した。さうして華やかな淫らな空氣を舞臺全體に漲らし得たところにも、この歌劇團の價値を現はして



日本では容易に見られないものだと思はれた。

第一幕の第一場が終るとともに、芳子は二階から一階に下りて、第二場を光子の席の隣りで観た。

「贅澤ねあなたは。この満員の中に座席を二つ有つてゐらつしやるんだもの。」と、光子は微笑みながら言つた。さうして「お妹さんを連れて来てお上げになると好かつたのに。」と言つた。

「解りやしませんよ、妹なんか。」と、芳子は多くの人々の中に自分の知つた顔はないであらうかと、一階の観覧席を一通り見渡した。

「解らないと言へば、誰れも解らないでせうが、でもいゝわね、一寸。」と、光子はうつとりと歡樂の氣分に浸るやうな様子をして言つた。其の途端に観覧席の電燈が消えて、幕がすうつとあがつた。

第二場は舞臺も暗かつた。淋しい町の夜を現はした舞臺装置の例によつて貧弱で、

間に合はせなものは仕方がないと思はれたが、けれどもこの場に初めて姿を現はしたジルダは可憐な娘に出来上つて、其のソプラノは見事であつた。リゴレットとの二部合唱も素晴らしくよかつた。

第二幕も面白く終つて、第三幕の河畔の場になつたが、それは第一幕第二場の道具を少し變へて使つてあつた。芳子はそこに尠なからず旅興の淋しみを感じて、それを隣りの光子に話すと、光子も同感だと言つた。しかしまたさういふ世界を跨にかけて旅藝人の侘しさといふところからも、或る情趣を味はふことの出来るのが面白かつた。

「舞臺装置ばかりぢやないんですよ。大事のコーラスなんかを抜いちまふのは、随分亂暴だと思ふことがあります。それも旅興行だから仕方がないわね。東京役者が加賀の金澤あたりへ行けば随分亂暴なことをすると言ひますからね。」と、光子は十分の同情をもつて舞臺に對してゐた。舞臺が廣過ぎて、背景の樹木が足りなくて、



この劇場に有り合はした歌舞伎劇の杉並木か何かを接ぎ足したところなど、殊に佷しく哀れに見えた。それでも石を積んだ塀を距て、男女二人づゝの四部合唱は、實に素晴らしいものだ、芳子は感に堪へなかつた。痛ましいシルダの最後、囊に納められた其の遺骸の蒼白い顔、それらを見た芳子は凄愴の感に打たれて、この悲歌劇の終りの幕が下りたのも知らないくらいであつた。バチ／＼と起る拍手の音に漸く自分といふものを回復して、光子の後から観覽席を出ると、一郎が其處に莞爾と立つてゐた。

光子を自動車で送つて行くと一郎が言つたが、光子は固く辭して、電車の方へ獨りで走つて行つた。芳子は何んだか光子に濟まないやうに思ひながら、一郎と、もに自動車に乗らうとしてゐるところへ、不意に松崎二郎の垢染みた顔が現はれて、一郎に向ひ、「ヤア。」と聲をかけた。

「君も來てゐたのか。ちつとも知らなかつた。君に紹介する人があるよ。」と、一郎

は何んとなく輕蔑するやうな風で松崎に言つた。

「一郎君と二郎君とだから、合はせて三郎君だ。」と詰まらないことを言つて、角井の姿も其處へ現はれた。

「君は何處に居たんだね。」と、一郎が松崎に訊くと、松崎はユヤリ笑つて、「三等だプロンタリアートだからなア。」と言ひ棄て、歸途を急ぐ人や車の中に紛れ込んでしまつた。今現はれたと思つた角井の姿も、もう見えなくなつてゐた。

芳子は今舞臺で見たシルダのことを、自分の身に引きくらべて、妙に哀しい物思ひに耽りながら囚人護送車へでも載せられるやうな心で、一郎と並んで自動車に乗つた。シルダと自分とは何んの類似點もないのに、何んだか自分もシルダのやうな最期を遂げるのではあるまいかと、考へられてならなかつた。

自動車が北の車寄せから、正面の玄關前へ、ブウ／＼と音を立て、廻つた時、電車路の方に黒い單衣の着流しで、日和下駄を穿いて、帽子を被らない松崎の姿を、



発見することが出来た。芳子は何んだか胸がいつばいになつた。

#### 四十五 顔を眞つ赤に

秋から冬まで、芳子には懊惱の月日が可なりに長く續いた。一ヶ月に一度づつ、一郎と連れ立つて、千葉の寒い海岸に、亡き中山女史の遺児を訪ねて、お金を置いて來るといふ仕事、芳子には苦痛の種になつた。琴子をば立派な婦人に仕立て上げて、地下の中山先生を慰めたいとは、芳子のかねての心がけであつた。今でも其の眞心に變りはないのだが、しかし、實際のところ、琴子のことどころではないといふくらゐに、自分の考へは切迫してゐる。

東華女學校の芳幸會は、其の後いよく世間の同情を得て、自由女學園創立の資金も集まり、中野の方に建物の新築中で、來年の四月からは、立派に開くことが出

來るといふことになつた。それと反對に、東華女學校の方は、流石に頑強を誇つた其の校風も、芳子の力で引き抜いた一つの小さな石から、じり／＼と土臺を崩されるやうなことになつて、この暑中休暇後あたりから、ぼつ／＼と退學者や轉校を生じ、今では四月頃の生徒數の三分の二を辛らくも引き留めてゐるといふ哀れな姿になつた。

芳幸會の幹事たちが來て、そんなことを得意氣に報告してくれても、今の芳子には、さう嬉しいとも思はなかつた。芳幸會どころではないといふやうな氣持ちにさへなつた。

『自由女學園創立委員長』といふ肩書の名刺を持つて、今井幸子さんのお父さんの乙彦さんが、芳子を訪ねて見えたのは、芳子を、自由女學園の評議員に推薦する爲めであつたが、芳子は自分なんぞ、まだ兎てもそんな重任にあたる資格がないと言つて、辭退した。



「いや、あなたが自由女學園創立の殊勲者です。行々は學園長にでもなつて頂きたいと思つてゐる筈です。實際さうです、評議員ではあなたを學園長に選舉するか知れませんが。自由女學園では虚名を賣つた老教育家や、實力のない、情力で世を渡つてゐるやうな思想界の大家を看板にするやうなことは決してしません。總べて若い方々にやつて頂くつもりで、わたしなんぞも創立の仕事が済んだら、直ぐ引き下がるつもりです。何んと言つても若い者の天下です。老人では生きた仕事が出来ません。」と、今井乙彦さんは、あんな大きな娘さんがあらうとは兎ても思はれぬ若々しい様子を見せて、元氣な聲で言つた。

この年輩で、あんな大會社の社員で、將來は實業家として有名になりさうなこの人が、これほどまで新時代に了解を有つてゐやうとは、芳子も豫期しなかつたことであつた。自分の父なんぞと違つて、こんなよく解つた人が、どうして其のお嬢さんを、あんな古い女學校へお入れになつたのかと、不思議でならなかつた。

に赤つ眞を顔

「それでは、どうかよろしく願ひいたします、わたくしには何んにも出来ませんが。」と言つて、芳子は到頭自由女學園の評議員を承諾してしまつた。

それから時々、この今井乙彦といふ人と會ふ用事があつて、一ヶ月に一回開かれる評議員にも、千葉行きとは違つて、進んで出席するやうになつたが、或る日丸の内の△△會社——それは今井さんの勤めて居られる——に附屬した俱樂部で自由女學園の評議員會があつて、重要な相談を済ました後に、

「花村さん、少しあなたにお話があるんですが……。」と、今井さんが仔細あり氣に言つて、別の一室へ導いて行くので芳子は不思議に考へながら跟いて行くと、大きな卓子に對ひ合つて椅子にかゝるなり、今井さんは飾り氣のない言葉で、率直に、「花村さん、あなたは結婚をなさる氣がありませんか。」と、芳子の顔を見詰めて、言つた。

「え、因襲的な結婚なんぞは厭やでございませう。」と、芳子もキツパリと答へた。

に赤つ眞を顔



『勿論です。あなたのやうな新時代の女性に向つて、わたしも因襲的な媒人なぞをしようといふのではありません。あなたの配遇者として、最もふさはしい一人の青年がここに一人あるのです。それはあなたも御存じの筈です。其の青年とあなたとの間に若し戀愛が成立したら、御結婚をなさるやうに、わたしが仲介の勞を取りたいのです。』と、今井さんは持ち前の雄辯で、説き伏せるやうに言つた。

芳子は、事によるとこれは、青木の一郎さん母子が手を廻はして、今井さんからこんな話をさせるのではないかと思つたので、厭やな氣持ちになつたが、しかし今井さんに對しては、もとより惡意をもつことが出来ぬので、

『其の方は何をなさつてゐらつしやるのです。若しや學生ではございませんか。』と探りを入れるやうに訊いてみた。

『いや學生ぢやありません。……藝術家です。賣り出しの美術家です。』  
さう言つた今井さんの聲に、芳子は忽ち心臓を刺された如く感じて、顔を眞つ赤

に赤つ眞を顔

にしながら差し俯向いた。

それはもうストロブの傍の戀しい冬の初めの黄昏のことであつた。

#### 四十六 室咲きの梅

新婦人の花村芳子と、新進美術家の松崎二郎とが結婚をするといふことが、何處から漏れたか、また、都下の新聞はこの二人の記事と寫眞とによつて賑はつた。さうして、どれもこれもこの良縁の前途に幸あれと、筆を揃へて祝福してゐた。

其の頃はもう今井さんの骨折りで漸く芳子の父母を納得させ、残るところは、たゞ父母から青木の方へ何んとか挨拶をしておかねばならぬといふことであつた。芳子は一郎に對しても疚しいことはなかつたけれど、父母はこの問題を非常に重大に考へて、『どうも今更斷りにくい。』なぞと頭を悩ましてゐた。いづれ其のうちには芳子

梅のき咲室



も承諾するであらうからといふやうなことで、芳子の人格を無視して、一郎の阿母さんとの間に、結納を取り交はすまでの話が進められてあつたことを、芳子は明らかに知り得て、今更に父母の考への古いのに呆れたのであつた。

「あゝア、新聞に出てしまつた。これは困つたわい。」と、芳子の父は其の新聞を前に擴げて頭を掻きながら、一日々々と青木の家へ斷り話に行くことを遷延した自分の過ちを悔いた。

「どうも仕様がな、これから行かうかな。」と、父の言つてゐるところへ、速達の書留郵便が來た。其の差し出し人は、青木一郎其の人であつた。

芳子さんお芽出たう。――

僕は、もう何んの苦痛もなく、かう言ひ得るまでに、諦めました。

僕に取つて今朝の新聞は、實に僕自身に對する死刑の宣告文を讀まされてゐるやうに感じました。僕は泣きました。母と二人で泣きました。二時間ばかり泣

きつてけました。さうして僕は諦めました。母も諦めました。『お前には過ぎてゐるんだよ、あんなえらい方は。……』さう言つて、母は涙を拭いて居りました。芳子さん、誤解してやつて下さいませ。母は決して厭や味を言つたのでありません。涙をばスツカリ絞り出してしまつた僕等母子には、もうあなたと松崎君とに對して、未來の幸福を祈る心だけが残つて居ります。母も改めてあなたがいつ夫を得られたことを衷心から喜んで居ります。僕も母も早速お祝ひに上りたいのですけれど、正直なところ、まだ少しく心が動亂してゐますのと、それから面あてか厭や味のやうに思はれるのを恐れて差し控へてゐます。それで手紙にしました。芳子さん、どうぞ、僕をあなたの友人として、いつまでも交つて下さい。――それは世間の失戀者が言ふ月並みの言葉でなく、僕は心の底からさう思ふのです。結婚式をお舉げになる時には、どうか僕等母子にも是非席末に列することを許して下さい。



一郎の手紙にはこんなことが書いてあつた。どうかすると銜氣に落ちようとする一郎さんを、芳子は兎角蟲が好かないのであつたが、この手紙によつて、スツカリ一郎さんのもつてゐるいゝところを見せられて、芳子は急にさめくと泣いた。父も母も皆其の手紙には泣かされたのであつた。芳子は一郎さんのこの手紙と松崎の血書の手紙とを、二つ重ねて、永久に保存しようと思つた。

結婚式なんぞ、どうでもいゝと、松崎二郎は言つたけれど、世俗の作法を、守るだけは守らなければいけないと言つて、萬事は今井乙彦さんの世話で、其の年も暮れに迫つた寒い日に、二人の結婚式は、築地の精養軒で行はれた。招かれて列席したのは、芳子の學友——芳幸會員を主として——松崎の友人なぞで、若い男女が大部分を占めてゐた。其の中に青木一郎さんと其の阿母さんが、紋服の盛装も物淋しく並んでゐたのは、氣の毒に思はれた。惨酷なやうな氣がするから、招待を見合はせようといふ説もあつたのだが、立派な祝物まで阿母さん自身に持つて来て、是

非に參列したいといふ希望であつたから、招待状を送つたのであつた。千葉から琴子さんも来て、青木の阿母さんの側にゐた。これから、青木の方へ琴子を引き取つて、世話をしようといふのであつた。芳子夫婦もそれに力を添るのは言ふ迄もなかつた。

式は今井さんの司會で始まつた。花籠を捧げた純白の洋装の少女二人に前導されて振り袖姿の芳子と新しいフロックコートの松崎とが、ピアノの音とともに式場へ練り出したところは芝居のやうであつた。芳子は束髪にして、月桂樹の枝を巻いてゐた。垢じみた和服を脱ぎ棄てた松崎二郎のフロックコート姿は、見違へるほどの花智振りであつた。

一郎さん母子は顔をそむけて、そつと涙を拭いてゐた。

式場の正面には、金屏風を立て、其の前の卓子には、東華高等女學校長藤島武一郎先生所藏の花瓶の毀れたのを模したのへ、室咲きの梅が生けられて、春に魁



著者、小長説花、瓶、畢、ナ

346 した芳香を放つてゐた。

何と云ふよきと配をくたし説を  
此の小説を讀了する迄  
よくびける度出をよ

る

青木一郎君の回中

然り

さつぱりつかみ所のあいの山説  
上司小剣の巻の巻の巻

梅のき咲室

小長説

花

瓶

畢

ナ

大正十一年三月五日印刷  
大正十一年三月十八日發行

正價金壹圓八拾錢

著者

上司小剣

發行者

株式會社博文館

右代發售  
取締役社長

大橋進一

印刷者

山形岩

發行所

株式會社博文館



複製

不許

(三印社會式株印得三)



國木田獨步遺著 (池田永治裝幀)

縮獨步全集

前後洋裝本美函入  
合編三六判千四百頁  
著者小照挿入

正價金參圓八拾錢 郵税金拾八錢

獨歩の作品は文壇覺醒の第一聲なりき、彼は明治文壇稀に見るの天才にして、其作品時に激越にして悲憤、時に閑雅にして眞摯、或は清雋なるあり或は奇峭なるあり、千様萬態人をして人生活畫圖の眼前に迫り來れるを覺えしめずんば止まず

永遠に新らしき生命ある獨歩全集は今や全く改版新裝して愈々光彩を發揮せんとす希くば愛讀の榮を給へ……………

加能作次郎氏著 (鍋井克之氏裝幀)

厄年

全一冊四六判 正價 金壹圓八拾錢  
函入上製 郵税 金拾貳錢

名作「世の中へ」大長篇「若き日」の作者として純潔玉の如き人格と、深く現實の人生に徹して無限の情趣を濼へたる其作品とによつて現下文壇に堂々重きをなす加能氏の創作集也

收むる處凡て九篇。近來無比の傑作「自然の主宰者の心に近ける者の尊き作品」とまで一般に激賞されし祖母を始め、氏の初期の作にして其出世作たりし厄年。發途の外氏の最も得意とする北國の漁村の生活を描ける秋の音。夜撫で。海邊の小社其他醜き女。火難。一二階の患者等の有数の佳篇を以てす、近時文壇の一大收穫として致へて江湖の精讀を煩はす。



私偵 立局 探長 著 岩井三郎

# 魔鏡

三六判洋裝函入美本  
紙數二百五十餘頁

正價金壹圓四拾錢

郵稅 八錢

民間探偵の鼻祖として敏腕の譽れ高き著者が過去十餘年に取扱へる諸種の事件中より最もロマンチックの色彩に富める十件を選び、其の探偵經過を詳細に叙述す。戦慄すべき社會の秘密、人間の罪惡を思ひ切つて痛烈に剔抉し、百鬼妖魔の正體を悉く白日の下に暴露す。一面に於て深刻なる世態人情の暗面史なり。世にありふれたる荒唐架空の作り話に飽きたる人々は速かに來つて此の貴き眞實を生ける教訓に輝ける記録を繕かれよ。

長田幹彦 著

# 九番館

小説

三六判布表紙函入美本  
紙數三百六十餘頁

正價金壹圓五拾錢

郵稅 八錢

文壇の寵兒 長田幹彦氏が、始めて執筆せる探偵小説なり。海外

に於て不義の富を積みし政商に對し、社會的の使命を帯びて現はれたる覆面の怪人物が、篇中に神出鬼没して魔の如く活躍す。花の如き美人が想思の子爵との間を割かれて地下室に泣き、可憐なる少女が銅像の台下に拘禁されて飢に叫び、一波は萬波を生んで滔天の勢をなす。蓋し最近の小説界に於ける偉大なる收穫として敢て江湖に推奨す。



江見水蔭 著

(池田永治装幀)

妖女魔女

全一冊袖珍  
装幀美本  
函入

正價金壹圓六拾錢  
郵税金 八 錢

▷ 容 内 ◁

血を飲む女……… 冤女と心臓  
 卵を抱く女……… 鹿戀女の躰  
 花を持つ女……… 蝸と密航婦  
 誤られた女……… 國辱の女  
 毒婦人の腕……… 毒婦と毒蟲  
 毒女優の眼……… 毒酒と少女

老大家の眼の輝きは、新作家のそれと全く焦點を異にして居ます。文壇の書宿江見水蔭先生が老熟の筆を以て、現代の妖女、冤女、變態の女、十二人の情話哀話を、縦横自在に描寫されたのが此一編です。新小説百出の中に、確かに異彩を放つて居りますのは上記の目次を御覽に成つたゞけでも御判りぞ存じます。……………



506  
41



終